

令和5年度
山口大学のFD報告書

山口大学 教育・学生支援機構
山口大学 教学委員会

I. 全学のFD

1. 教育・学生支援機構関連のFD	1
2. 共通教育授業科目別部会のFD	8
3. 学生授業評価及び教員授業自己評価	10

II. 学部・研究科のFD

1. 人文学部のFD	16
2. 教育学部のFD	18
3. 経済学部のFD	24
4. 理学部のFD	28
5. 医学部のFD	36
6. 工学部のFD	46
7. 農学部のFD	49
8. 共同獣医学部のFD	53
9. 国際総合科学部のFD	64
10. 人文科学研究科のFD	72
11. 教育学研究科のFD	74
12. 経済学研究科のFD	78
13. 医学系研究科のFD	79
14. 創成科学研究科のFD	80
15. 東アジア研究科のFD	85
16. 技術経営研究科のFD	89
17. 共同獣医学研究科のFD	91

令和5年度 山口大学 教学委員会名簿

山口大学 学部・研究科FDコーディネータ名簿

山口大学 教学マネジメント室名簿

I. 全学の FD

＜ 1. 教育・学生支援機構関連の FD ＞

（ 1 ） 山口大学全学 FD ・ SD 講演会

開催日時	令和 5 年 10 月 6 日（金）	開催場所	オンライン
テーマ	学修者中心のインタラクティブ・ティーチング		
講師	栗田佳代子 氏 （東京大学 大学院教育学研究科教授、大学総合教育研究センター副センター長・大学院新領域創成科学研究科 特任教授）	参加者	教職員 30 名
研修内容 『2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』や『教学マネジメント指針』等を通して学修者本位の教育への転換が必要とされている。本研修会は、新任・若手から中堅・ベテラン教員も含め、自らの教育力向上を目指し、コース・デザインやインタラクティブ・ティーチングの方法を取り入れ、シラバスの構造化を行う視点を養うことを目的として実施した。 研修会では、個人ワークとグループワークを通じて自らの教育活動の振り返りを行った。参加者同士で共有することにより、自信で気づけなかった発見、新しい視点を得ることができ、参加者は今後につながる気づきを見出した。			
開催日時	令和 6 年 11 月 10 日（金）	開催場所	共通教育棟 15 番教室
テーマ	教務系職員のための基礎知識		
講師	藤本正己氏 （山口大学 教学マネジメント室 講師）	参加者	教職員 49 名
研修内容 「同じ時間数でも単位数が違うのはなぜだろうか」「押さえておくべき法令・政策は何なのだろうか」「何をもとにして、学内のルールができているのだろうか」。このような疑問は、多くの職員が抱いているのではないかと。本研修会は、教務系職員に焦点をあてて高等教育に関するさまざまな制度や政策の基礎的な知識を提供することで、参加者が抱かれる疑問の解決につながる機会として実施した。			

(2) その他の研修会

開催日時	令和5年4月4日(火)	開催場所	吉田地区メディア講義室 (オンライン同時開催)
テーマ	新任教員研修会		
講師	【後半】 葛崎偉 氏 (山口大学 副学長(教育学生担当)) 岡田菜緒子 氏 (山口大学 学生支援センター 准教授) 岩野摩耶 氏 (山口大学 教学マネジメント室 講師)	参加者	教職員 47 名
研修内容 新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深めることを目的に実施した。なお、本研修は大学主催で総務企画部人事課と共同実施をしているため、教育・学生支援機構は、後半部分を以下のテーマを担当した。 ・教育・学生支援について (葛崎偉 氏) ・障害等のある学生の修学支援について (岡田菜緒子 氏) ・授業の設計と学生主体の教育方法について (岩野摩耶 氏) ・修学支援システムや Moodle の使い方について (岩野摩耶 氏)			
開催日時	令和5年4月5日(水)	開催場所	オンライン
テーマ	TA・SA研修会		
講師	野崎浩二 氏 (山口大学 教育支援センター長 (大学院創成科学研究科 教授)) 岩野摩耶 氏 (山口大学 教育マネジメント室 講師) 岡田菜穂子 氏 (山口大学 学生支援センター・ 学生特別支援室 准教授) 森本宏志 氏 (全学労働安全衛生管理室主任・ 保健管理センター 准教授)	参加者	教職員 45 名 学生 433 名
研修内容 TA・SA として初めて採用される者および担当教員を対象として、TA・SA としての心構えや注意事項を理解してもらうことを目的に実施した。 以下の4つのセッションについて解説を行い、終了後にはアンケートとクイズを実施した。 ・TA・SA の職務内容と注意点 (野崎浩二 氏) ・学びのサポーターとしての TA・SA (岩野摩耶 氏) ・障害等のある学生への配慮について (岡田菜穂子 氏) ・大学の授業における安全衛生 (森本宏志 氏)			

(3) 教育改善 FD 研修会

開催日時	第1回:令和5年7月26日(水) 第2回:令和5年10月25日(水) 第3回:令和5年11月24日(金)	開催場所	オンライン
テーマ	教育改善 FD 研修会 (全3回)		
講師	藤本正己氏 (山口大学 教学マネジメント室 講師)	参加者	教職員 616 名
研修内容 第1回：山口大学の教学 IR－2022 年度在学生調査の結果報告 2022 年度に実施した在学生調査における結果報告を行い、参加者との意見交換を行った。 第2回：山口大学の教学 IR・2022 年度卒業・修了時の学生生活に関する調査結果・ 2022 年度に実施した卒業・修了時の学生生活に関する調査の結果報告を行い、参加者との 意見交換を行った。 第3回：山口大学の教学 IR－2023 年度卒業・修了後のキャリア形成に関する調査結果報告 卒業生・修了生（2019 年 9 月又は 2020 年 3 月）を対象としたキャリア形成に関する結果 の報告を行い、参加者との意見交換を行った。			

(4) 大学教育セミナー・大学マネジメントセミナー ※大学リーグ主催

開催日時	令和5年9月25日(月)	開催場所	オンライン
テーマ	【大学教育セミナー】 授業デザインの基礎知識		
講師	竹中 喜一 氏 (近畿大学 IR・教育支援センター 准教授)	参加者	教職員 45 名
研修内容 『2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』や『教学マネジメント指針』等を通して学修者本位の教育への転換が必要とされている。本研修会は、新任・若手教員のキャリア育成を行うために、「自己の担当する授業科目」の振り返りを行い、授業改善を行う力を養成することを目的として実施した。2つのセッションに分けて実施し、セッション1では「15回の授業の設計方法」、セッション2では「90分の授業の設計」について学ぶことで自らの教育力向上を目指した。 セッション1:「15回の授業を設計する」 近年の学修者中心の教育動向を踏まえ、授業の到達目標やカリキュラム全体を意識した授業を設計する基本をおさえる セッション2:「90分の授業を設計する」 90分の授業の導入、展開、まとめ、事前事後学習、成績評価の要点をおさえる			
開催日時	令和6年10月20日(金)	開催場所	41 教室
テーマ	【大学マネジメントセミナー】 高等教育の動きを知る 大学教育の動向と取り組むべき課題		
講師	玉上晃 氏 (一般社団法人国立大学協会 次長・審議役) ※話題提供 岩野摩耶 氏 (山口大学 教学マネジメント室 講師)	参加者	教職員 78 名
研修内容 2022年10月1日の大学設置基準等の改正では、「教員組織」から「教育研究実施組織」へと、教員と事務職員等の関係を一体的に規定することとされている。教育研究活動から学生支援の各種活動、大学運営等を含めた教職協働の実質化が促進され、より一層の教育研究活動の質向上を期待するとされ、職員の役割もますます重要になってきている。本研修会は、大学職員として知っておくべき、大学設置基準の改正、教育未来創造会議第一次提言や中央教育審、議会大学分科会等で取り上げられている内容、今後の自己点検評価の視点、職員の将来像等について解説することで、幅広い業務をこなす職員像や期待される役割について考える機会とした。			

(5) 講師派遣型 FD 研修会

開催日時	2023 年 9 月 20 日 (水)	開催部局	教育学部
テーマ	Moodle コースのデザインと小テストの基礎		
講師	齊藤智也氏 (山口大学 情報基盤センター 講師)	参加者	教職員 23 名
研修内容 新たに Moodle の活用を始める方々を対象として、基本的なコース設定、ならびにコンテンツの配置の手順について解説した。 研修内では、いくつかの基本的な問題種別を例として、小テストの作成と実施の方法についても紹介を行った。			
開催日時	2023 年 11 月 22 日 (水)	開催部局	農学部
テーマ	Moodle コースのデザインと小テストの基礎		
講師	齊藤智也氏 (山口大学 情報基盤センター 講師)	参加者	教職員 19 名
研修内容 新たに Moodle の活用を始める方々を対象として、基本的なコース設定、ならびにコンテンツの配置の手順について解説した。 研修内では、いくつかの基本的な問題種別を例として、小テストの作成と実施の方法についても紹介を行った。			

開催日時	2023 年 12 月 20 日（水）	開催部局	人文学部
テーマ	「令和の日本型学校教育」に対応する教育課程と大学入試		
講師	和泉研二 氏 （山口大学 アドミッションセンター長）	参加者	教職員 38 名
研修内容 ①学習指導要領の改訂に伴う「令和の日本型学校教育」について、特に国語・英語の事例を中心に紹介を行った。また、課題探求型授業の導入事例として防府西高校の事例が紹介した。 ②共通テストの導入に伴う入試問題の変化の予想について、こちらもとりわけ国語・英語の事例を中心に紹介を行った。 ③少子高齢化に伴う山口県の人口動態予測と、それに伴う山口大学の入試のありかたの課題について解説した。 質疑応答を踏まえ、新しい指導要領による教育を受けた学生がすでに受験を迎えようとしていることが確認された。とくに人文学部では教職科目を設定していることから対応が急務である。また入試作問者としての立場からの質疑があり、種々課題が浮かび上がった。			
			
開催日時	2024 年 2 月 14 日（水）	開催部局	理学部
テーマ	実践例から学ぶ障害等のある学生への「合理的配慮」		
講師	岡田菜穂子氏 （山口大学 学生特別支援室支援 コーディネータ 准教授）	参加者	教職員 50 名
研修内容 学生特別支援室は、障害等のある学生の修学支援のための学内拠点であり、障害等のある学生や支援に関わる教職員からの相談に対応するとともに、学内の関連部局と連携して修学支援のコーディネートを行っている。 研修会では、学生特別支援室での相談対応や授業中の配慮実践例を紹介しつつ、合理的配慮のポイントの説明と質疑応答を行った。			
			

開催日時	2024 年 3 月 4 日（月）	開催部局	理学部
テーマ	就職活動・インターンシップの新しいカタチ		
講師	平尾元彦 氏 （山口大学 学生支援センター・ 就職支援室 教授）	参加者	教職員 31 名
研修内容 学生の就職活動について、過去 10 年程度の活動開始時期の変遷と三省合意の改訂内容、最近の企業の採用活動状況等について説明の後、質疑応答を行った。			



＜ 2. 共通教育授業科目別部会の FD＞

（１）運動健康科学部会

部会で FD は開催しなかったが、年度末（3 月 27 日）に部会員間での情報交換をオンライン会議で行った。この会議では、毎年度行っている今年度の振り返りと次年度への申し送りに加え、昨年度に引き続き今年度も、成績評価分布の状況について、今年度提出した報告書をもとに具体的な意見交換を行い、成績評価分布の状況を踏まえながら授業に取り組むという点に関しての情報の共有を行った。また、授業のシラバス作成における注意点などの確認も行った。

（２）英語部会

年度をまたぐ形になりますが、令和 6 年 4 月 1 日に、非常勤の先生がた向けに FD を行う予定です。改めまして、山口大学の英語の授業について、説明を行う予定です。

（３）数学部会

プレースメントテストを実施し、受講生のクラス分けを行った。例年約 60 点より上位と下位にクラス分けを行ってきたが、今年度は 50 点より上位と下位にクラス分けを行うことになった。講義等に影響が出る懸念があるので、部会員の間で情報共有を諮った。

（４）物理学部会

令和 4 年度共通教育の物理学分野の科目(物理学Ⅰ、物理学Ⅱ、物理学実験)における成績評価分布について点検を行った結果、いずれの科目においても「秀」や「不可」の評価が 50%を超えるような著しい成績の偏りは見られなかった。

物理学ⅠとⅡの成績分布はクラス間では違いは見られるものの、学部・学科内では公正を欠くものではなかった。

共通教育学生実験について、理学部において担当している教員間で、今後の実験のあり方(特に物理・情報科学科以外)について種々の意見交換を行い、令和 6 年度からレポートの負担を減らした形で実験の実施を試行することとした。

近年、学習障害等を持っている受講生が増加しているように思われるので、このことに担当教員としてどのように対処すべきかという課題についての講習会等の実施を希望する。

（５）化学部会

化学物質の取り扱いに関する法律が厳密化され、保護手袋の着用が義務付けられた。実験で着用する手袋を教育支援センターで準備していただき、全員が着用して実施することができた。

化学実験のテキストの内容をよく理解できず、所定の時間内に実験を終了することができない、あるいは実験テキストに記載されているレポート課題を解くことができない学生が増えていることに関連し、化学の学習相談室を担当する非常勤講師の負担も増えている。このような状況を鑑み、化学実験の内容の変更とテキストの改訂を進めている。非常勤講師の笠谷先生に改訂を依頼しており、令和 7 年度に具体的な改訂版を作成して頂く予定。

（６）生物部会

各部局での FD に参加してもらうこととし、2023 年度の FD は特に実施しなかった。

(7) 地球科学部会

特になし。

(8) 日本国憲法部会

まず、部会所属教員 4 名に「成績評価等に関するガイドライン」に基づき、自己点検をしてもらった結果、いずれも「特に問題なし」とのことであった。

次に、部会長という立場より総合的に確認した結果、成績評価の分布には若干の偏りがあると判明したため、今後成績評価に当たっては著しい偏りのないよう注意喚起を行った。

< 3. 学生授業評価及び教員授業自己評価 >

【学生授業評価】

1. 実施方法

山口大学修学支援システムにて実施している。実施率は多くの学部で 90%～100%となっている。なお、一部の学科や科目に関しては独自のシステムを利用しているため、本結果には反映されていない。

各科目の集計結果については、担当教員にフィードバックされ、教員の自己評価と合わせて科目の改善、また各学部の FD やカリキュラム改善等に活用されている。

全体結果については、次ページ以降に集約する。

2. 質問紙

※令和 4 年後期より質問を一部変更しました。

Q1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値）

- ①90%以上（14 回以上） ②80%～90%未満（12～13 回）
③60%以上～80%未満（9～11 回） ④40%以上～60%未満（6～8 回）
⑤40%未満（6 回未満）

Q2 あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。

- ①3～4 時間程度又はそれ以上 ②2 時間程度 ③1 時間程度 ④30～50 分程度 ⑤30 分未満

Q3 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない
④あまりそう思わない ⑤そう思わない

Q4 Q3 で回答した判断理由を教えてください。

()

Q5 あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない
④あまりそう思わない ⑤そう思わない

Q6 Q5 で回答した判断理由を教えてください。

()

Q7 あなたは、この授業について満足しましたか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない
④あまりそう思わない ⑤そう思わない

Q8 Q7 で回答した判断理由を教えてください。

()

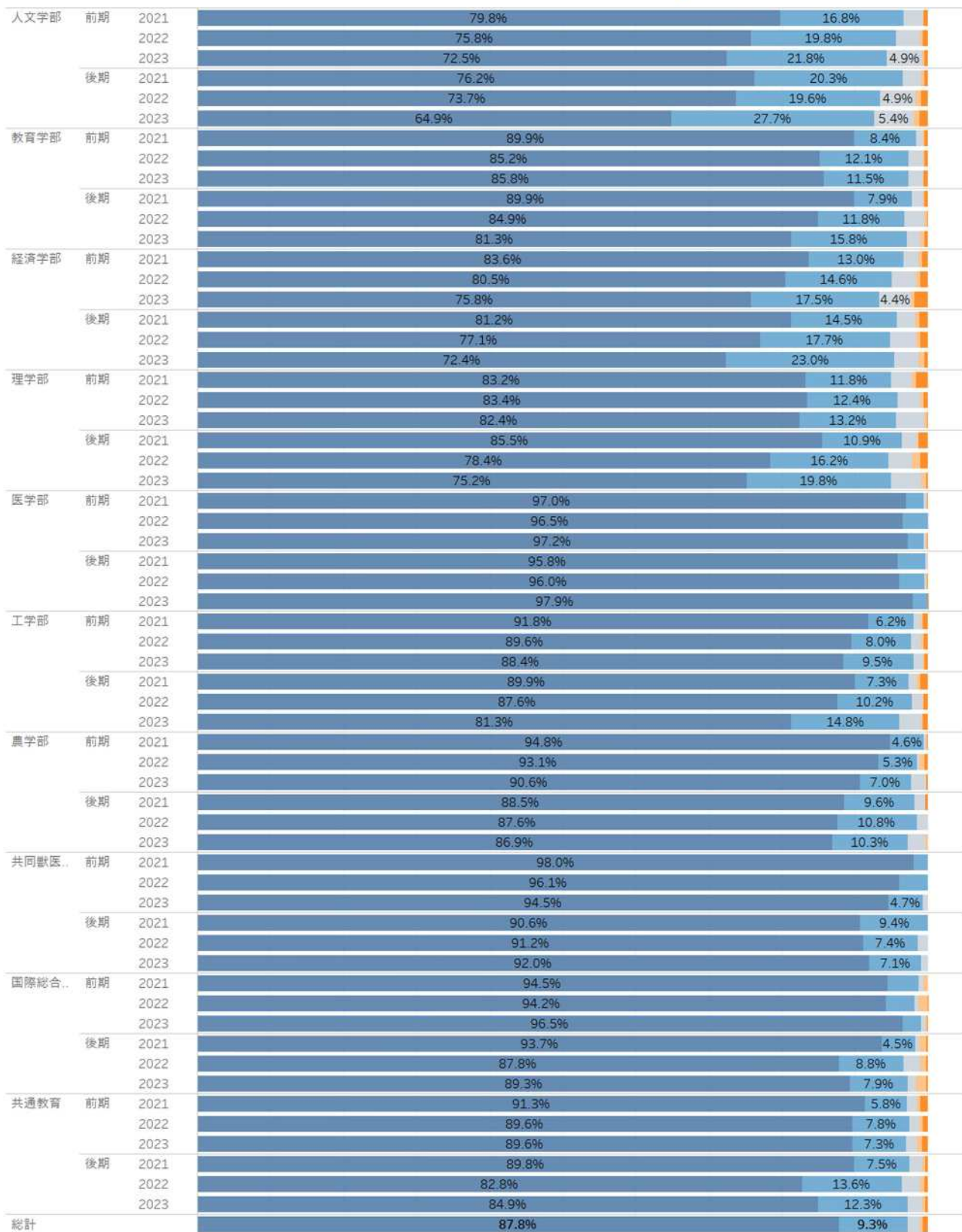
Q9 この授業に関する感想や要望等があれば、具体的に記述してください。

()

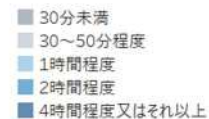
【教員授業自己評価】

山口大学修学支援システムにて実施している。学生授業評価のフィードバックと合わせて教員が自ら遊行の振り返りを行い、科目の改善、また各学部の FD やカリキュラム改善等に活用されている。

問1 この授業にどれくらい出席しましたか

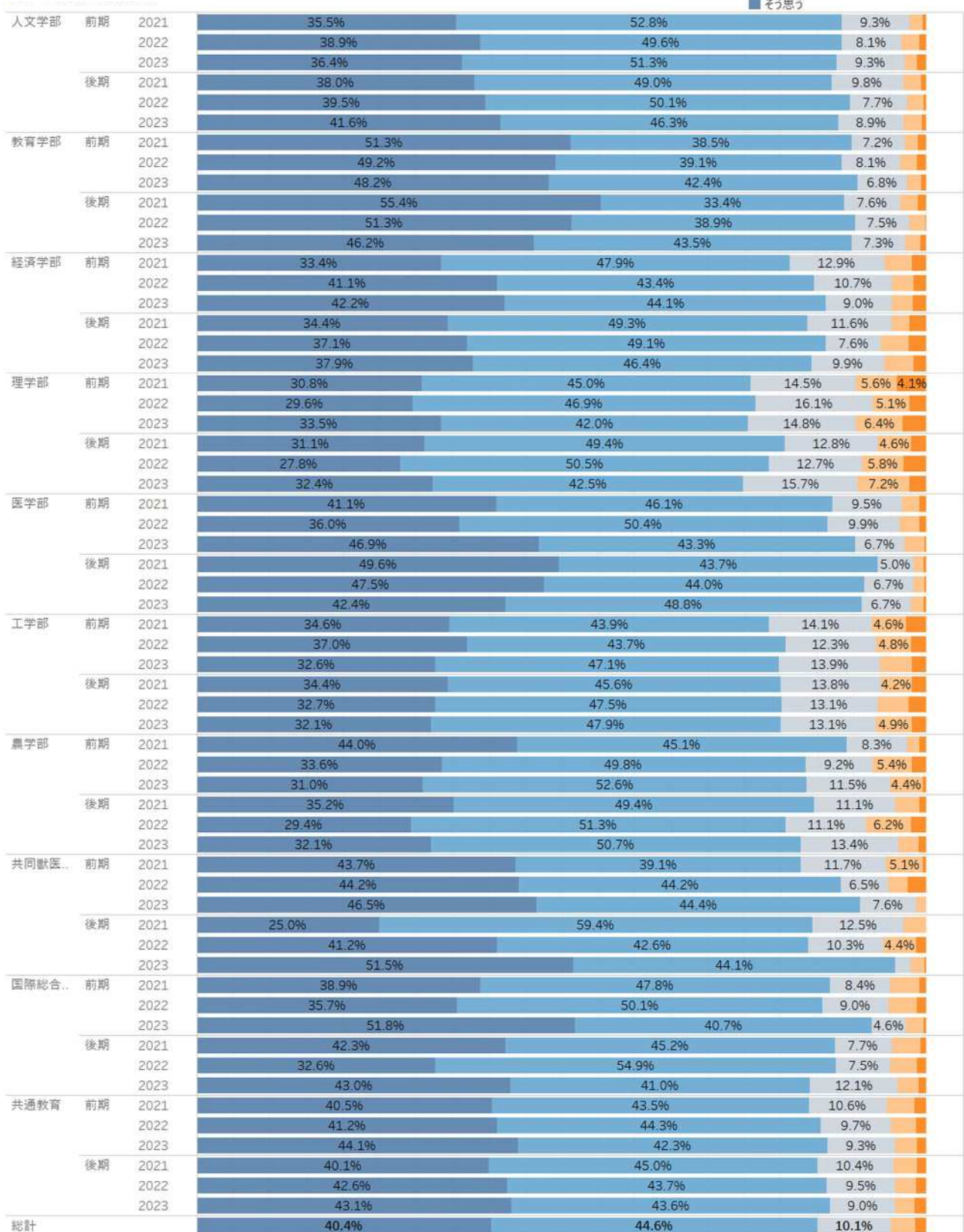
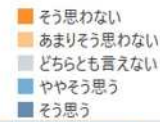


問2 この授業において授業外学習をどれくらい行いましたか
(授業1回あたりの時間に換算して回答)

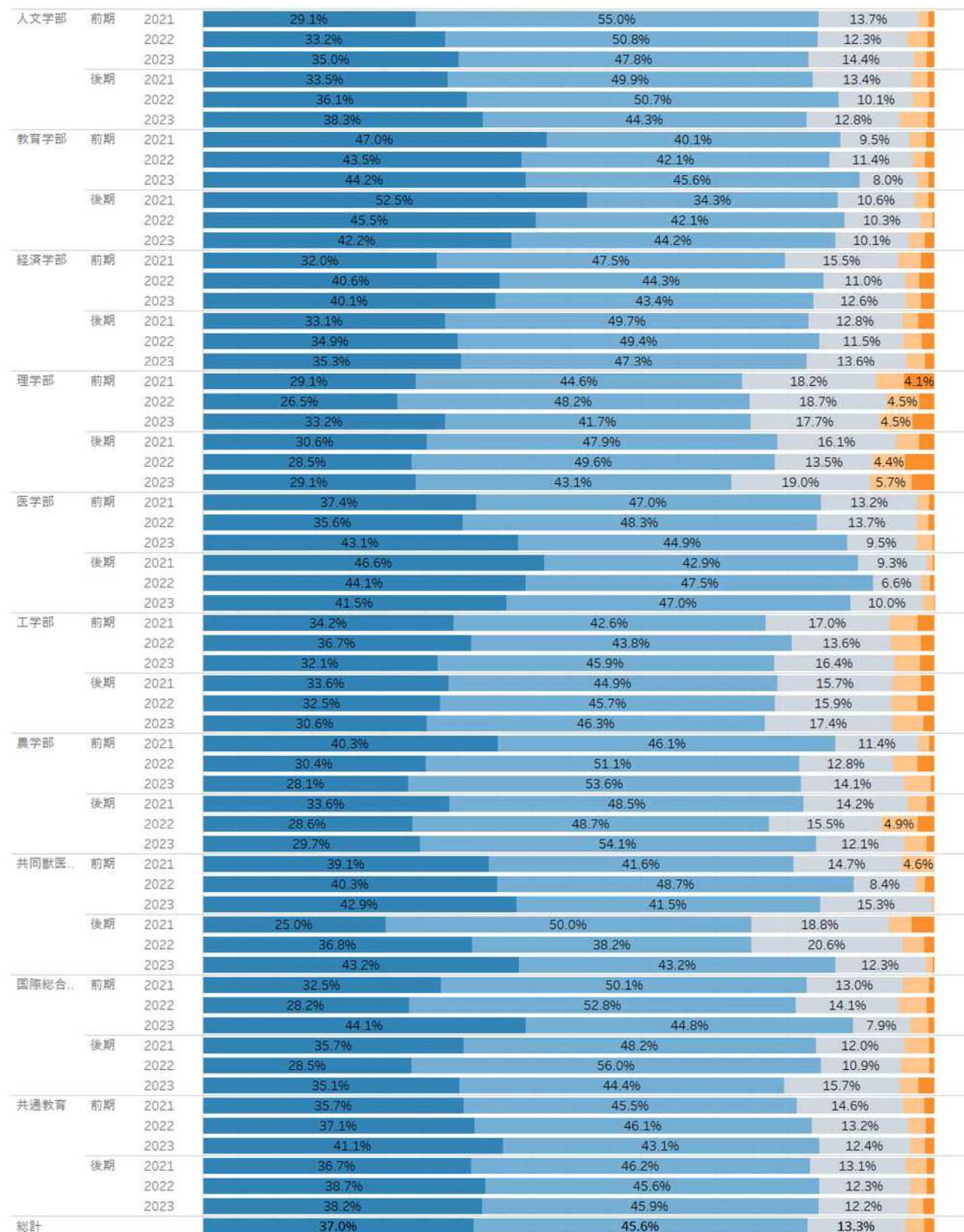
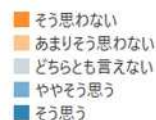


人文学部	前期	2021	14.1%	17.4%	30.4%	18.5%	19.6%	
		2022	13.8%	20.5%	30.2%	17.0%	18.5%	
		2023	13.7%	18.2%	29.1%	18.5%	20.4%	
	後期	2021	13.4%	20.6%	30.8%	19.8%	15.5%	
		2022	13.0%	19.6%	30.0%	19.8%	17.6%	
		2023	14.6%	23.0%	29.2%	15.9%	17.3%	
	教育学部	前期	2021	19.3%	17.6%	32.0%	16.8%	14.3%
			2022	16.2%	18.5%	28.7%	19.7%	16.9%
			2023	16.7%	19.1%	25.5%	19.0%	19.7%
後期		2021	20.4%	20.6%	31.9%	15.1%	11.9%	
		2022	10.5%	19.7%	31.2%	18.1%	20.4%	
		2023	13.4%	16.9%	29.1%	19.3%	21.3%	
経済学部	前期	2021	15.8%	17.5%	34.4%	18.4%	13.9%	
		2022	18.5%	16.8%	29.2%	18.7%	16.7%	
		2023	19.7%	16.1%	27.4%	19.5%	17.3%	
	後期	2021	12.7%	15.5%	35.3%	19.7%	16.8%	
		2022	16.8%	17.3%	28.5%	18.8%	18.7%	
		2023	13.4%	14.0%	33.9%	21.8%	16.9%	
理学部	前期	2021	23.3%	28.5%	31.3%	11.0%	6.0%	
		2022	23.7%	29.1%	29.8%	9.8%	7.7%	
		2023	23.9%	28.6%	29.7%	9.9%	7.9%	
	後期	2021	26.3%	23.8%	31.7%	11.9%	6.3%	
		2022	23.6%	27.8%	27.3%	11.6%	9.6%	
		2023	26.0%	27.9%	30.7%	10.0%	5.4%	
医学部	前期	2021	22.3%	18.0%	29.4%	16.0%	14.4%	
		2022	19.1%	21.7%	27.6%	16.8%	14.8%	
		2023	30.9%	19.9%	25.2%	12.8%	11.2%	
	後期	2021	25.7%	19.7%	24.2%	16.2%	14.3%	
		2022	25.0%	19.9%	28.0%	14.7%	12.5%	
		2023	22.0%	21.4%	26.9%	14.8%	14.9%	
工学部	前期	2021	25.2%	22.9%	35.3%	10.9%	5.8%	
		2022	20.3%	24.1%	36.1%	13.4%	6.0%	
		2023	21.3%	26.7%	33.2%	13.2%	5.5%	
	後期	2021	23.5%	23.5%	34.7%	11.5%	6.7%	
		2022	19.6%	25.0%	35.1%	13.0%	7.3%	
		2023	24.3%	22.8%	31.7%	13.4%	7.7%	
農学部	前期	2021	20.4%	20.3%	30.9%	15.1%	13.3%	
		2022	17.4%	27.3%	28.7%	15.4%	11.2%	
		2023	16.4%	21.6%	34.9%	16.1%	10.9%	
	後期	2021	20.0%	18.7%	26.8%	16.7%	17.8%	
		2022	14.2%	20.4%	29.1%	19.6%	16.8%	
		2023	12.4%	21.7%	28.3%	16.6%	21.0%	
共同獣医..	前期	2021	19.3%	21.3%	29.4%	17.8%	12.2%	
		2022	24.7%	30.5%	16.2%	11.0%	17.5%	
		2023	15.3%	29.1%	25.1%	15.6%	14.9%	
	後期	2021	37.5%	21.9%	18.8%	12.5%	9.4%	
		2022	14.7%	39.7%	26.5%	13.2%	5.9%	
		2023	20.7%	26.2%	26.5%	11.1%	15.4%	
国際総合..	前期	2021	12.6%	21.1%	33.2%	18.9%	14.2%	
		2022	18.5%	25.7%	27.7%	14.0%	14.0%	
		2023	21.3%	31.5%	26.9%	12.1%	8.3%	
	後期	2021	11.7%	19.8%	32.8%	19.4%	16.2%	
		2022	13.7%	21.5%	26.4%	19.9%	18.4%	
		2023	20.2%	23.3%	21.6%	20.5%	14.3%	
共通教育	前期	2021	13.5%	15.4%	28.7%	18.9%	23.5%	
		2022	13.5%	17.0%	27.2%	17.8%	24.5%	
		2023	15.2%	16.5%	25.5%	18.4%	24.3%	
	後期	2021	14.1%	14.8%	26.7%	19.7%	24.8%	
		2022	13.3%	16.1%	28.2%	19.5%	22.9%	
		2023	14.0%	16.7%	27.2%	19.2%	22.9%	
総計			16.8%	18.9%	29.5%	17.1%	17.7%	

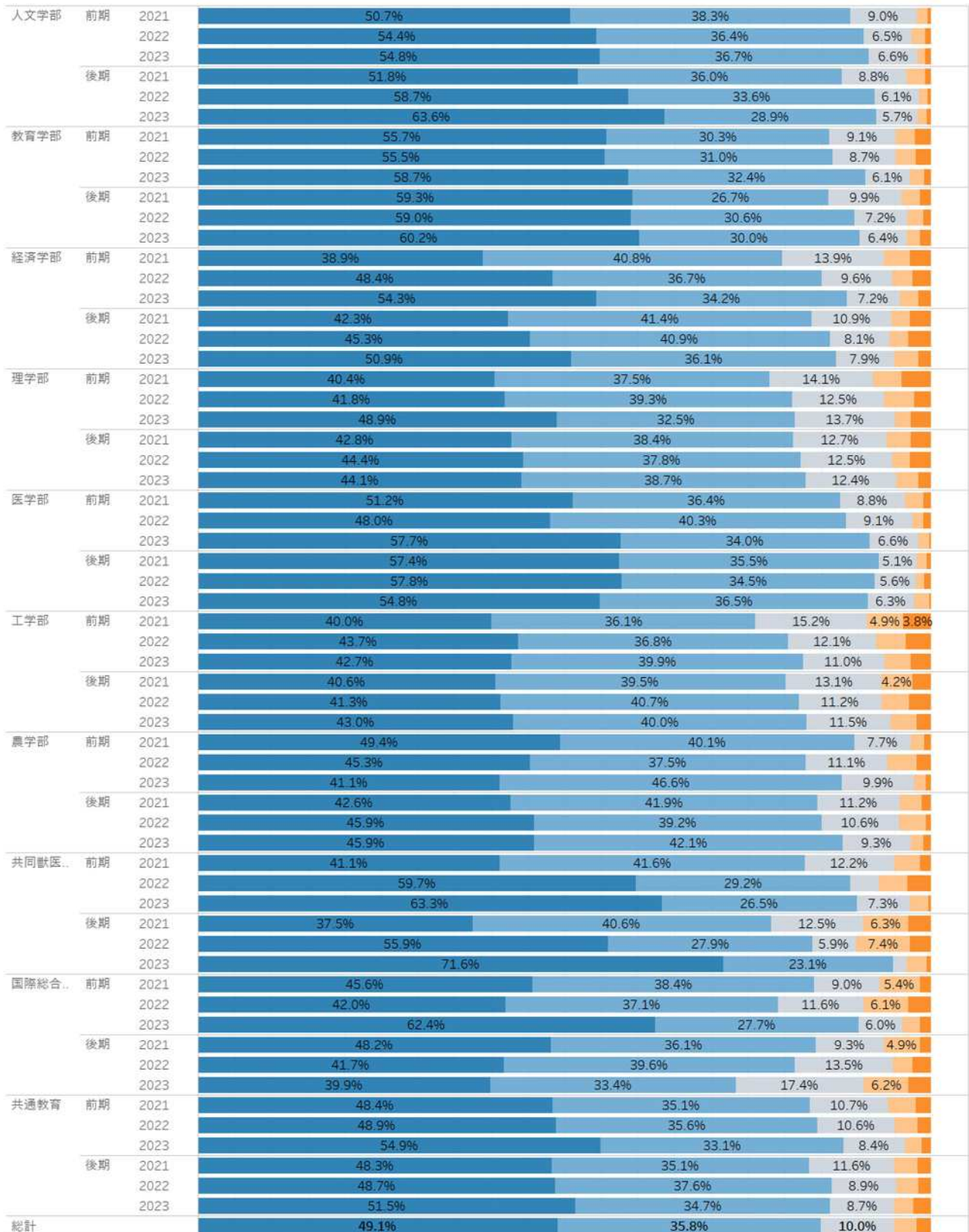
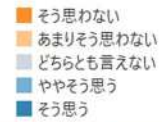
問3 授業の内容を理解できましたか。



問5 シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか



問7 この授業について満足しましたか



II. 学部・研究科の FD

＜ 1. 人文学部の FD ＞

（ 1 ） 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 5 年 6 月 21 日（水）	開催場所	人文・理学部棟大会議室
テーマ	コロナ下に着任された先生方からご研究について自己紹介していただく		
講師	黒羽亮太、中元さおり、カテリーナ・オリハ、鈴木舞、伊藤裕水	参加者	教職員 39 名
研修内容  コロナ対策期間のあいだ対面で会議等が開催できなかった事情をふまえ、着任した教員から対面での研究等について語ってもらうことで本年度の研修題材とした。具体的には、6 名の教員からそれぞれ 5 分程度にわたって、それぞれの学問的関心や領域について、レクチャーをいただいた。 人文学部には多様な研究分野の教員がおり、各自の想定する学問像にも共通性と多様性が存在する。学部構成員の人柄や研究内容を知ること、学部の教育内容についての知見を更新することを目的とした。事後に実施したアンケートの結果は「コロナ禍中の御着任で十分にご挨拶できなかった先生方のお仕事やお人となりを親しく知るよいきっかけとなった」「特に他のコースの先生方の研究について知れてとても興味深かった。……相互理解のために有益」などおおむね好評であり、研修会として所定の目的を達成できたと思われる。			
開催日時	令和 6 年 1 月 10 日（水）	開催場所	人文・理学部棟第 1 小会議室
テーマ	全学 FD 研修会の振り返り		
講師	FD 部会	参加者	教職員 13 名
研修内容 全 3 回実施された全学の FD 研修会（動画視聴）を踏まえて、人文学部での振り返りの研修会を行った。学部の教務学生部会員を中心として、FD 部会員が参加した。 2022 年度卒業生を対象としたアンケートにおいて山口大学を卒業して良かったと感じるか、の質問に対して、とても良かったと答えた学生の割合が 35.0%、よかったと答えた学生の割合が 56.3%、現在の専門を学んだことを誇りに思うかの質問に対して、とても良かったと答えた学生の割合が 61.3%、よかったと答えた学生の割合が 31.3%となっている。コロナ禍に在学した学生が対象であり通常と異なる大学生活となった点を踏まえれば、教職員の努力が報われたよい評価となっているという受けとめがあった。 文理横断型授業の履修機会や、外国語を使う能力に関する質問項目への回答傾向については、評価が低めになっている。ただし人文学部は、「専門」に対する評価が高く、「満足度」も高い。このような人文学部としての長所・利点を損なわぬよう、アンケート結果の受けとめかたには、留意が必要ではないかという意見があった。 専門的知識の修得の有無に関する質問項目への回答傾向については、違和感が表明された。意外に低めの評価になっているが、卒業論文を書きあげたはずの実績との関係で言えば、これは謙虚すぎる自己評価と言える。総じて、学生側の実績とその自己評価・自己肯定感との間には、かなりズレのある様子が窺える。そこで、学生の自己評価・自己肯定感を高めてもらえるような説明の工夫や、アンケートの質問文言の工夫等が今後の課題になるのではないかと意見があった。 全学の分析結果に対しては、画一的な択一アンケートだけを指標とするのではなく、ポートフォリオなど記述による分析を期待したいとの声があった。			

(2) 教育改善

教育改善のためのピアレビュー

人文学部の教員の中からレビュー教員 5 名を選出して実施している（平成 30 年度より）レビュー教員は参観する授業を任意に選択し、授業担当教員に依頼して参観する。

本年度参観を担当した 5 名の教員からは、いずれもアンケートのレベルを超えた詳細なレポートが作成された。とりわけ授業手法の点においての知見が得られたという報告、およびオムニバス授業において教員どうしの連携について有益な情報共有ができたという報告などがあった。

前期共通科目「基礎セミナー」の運営

人文学部 F D 部会では例年、「基礎セミナー」の統括運営を担当し、初年次教育に関わる授業担当教員を支援している。そのために前年度 2 月に担当教員・教務関係者・学務系の連携で打ち合わせのための研修を行った。授業を担当する教員が円滑に授業実施できるような取り組みとして、授業担当者に各回の授業内容・問題点・改善点等に関するアンケートを行い、整理して引き継ぎを行っている。

現行の「基礎セミナー」の運営についてはおおむね好評であるも、教えるべき内容に対して授業回数が少ないという意見があった。

学生授業評価・教員授業自己評価

令和 4 年度の「学生授業自己評価」では、昨年度から続く学生の出席率と授業外学修時間の微減傾向は継続しているのが見られる。他方で、授業の理解度・満足度その他についての数字は改善されている。出席率は令和 4 年度前期・後期で 80%以上の回答者が 96%と 94%であったのに対して、令和 5 年度にはいずれも 94%と高い数字を維持している。他方で、授業外学習時間に関しては、令和 4 年度で 2 時間程度以上の回答者が前期・後期とも 33%であったのに対して、令和 5 年度には 36%と 31%とほぼ横ばいである。

授業の内容を理解したかという設問に対して、令和 4 年度前期・後期で「ややそう思う」以上の回答が 89%と 90%であったのに対して、令和 5 年度では前期・後期とも 87%である。同じく、シラバス記載の到達目標については「ややそう思う」以上の回答が令和 4 年度前期・後期で 83%、86%であったのに対して、令和 5 年度ではそれぞれ 82%、83%と微減している。

これに対して、授業への満足度については、令和 4 年度前期・後期で「ややそう思う」以上の回答がそれぞれ 88%と 87%であったのに対して、令和 5 年度では 91%、93%と高い満足度となった。

「教員授業自己評価」においては、学生がシラバスの到達目標に達しているとした割合については、令和 4 年度前期・後期では「ややそう思う」以上が 85%、84%であったのに対して、令和 5 年度は前期 75%、後期 79%とやや後退している。

他方で、学生が授業内容を理解しているかどうかについては「ややそう思う」以上が令和 4 年度において前期・後期と 63%、64%であったのに対して、令和 5 年度では前期が 93%と大きく改善しているのに対して、後期は 70%と低下している。

このような教員の側の自己評価について、来年度も低下傾向が続くのかどうか、引き続き注視してゆきたい。

＜ 2. 教育学部の FD ＞

（ 1 ） 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2023年7月19日（水）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	『卒業生調査報告書』について		
講師	白石敏行（山口大学教育学部教授）	参加者	68名
研修内容 自己点検評価部は、平成30年度から『卒業生調査報告書』を作成している。この『報告書』は、教育学部を卒業し県内の学校に新任教員として赴任した卒業生およびその赴任校の管理職を対象に、自己点検評価部（最初はFD・評価部）が意見の聞き取りを行い、取りまとめたものである。今回は、令和3年度と令和4年度の『報告書』の比較から抽出した主な意見と課題について報告が行われた。 卒業生には、「卒業論文・卒業研究、教育実習、授業・ちゃぶ台プログラムについて」の3項目の質問を行った。 1）卒業論文・卒業研究：コロナ禍で満足な取り組みができなかったと回答するものが多いが、卒業論文・卒業研究自体の満足度は高い 2）教育実習：コロナ禍であったが教育現場と実感できた一方で、校務分掌や特別支援教育に関する知識が不足していることを実感 3）授業・ちゃぶ台プログラム：模擬授業やちゃぶ台プログラムへの高評価 以上の3点が報告された。 管理職には、「県の教員育成指標と本学部卒業生の状況、教育学部／教員養成に対する意見」について質問を行った。以下のような意見が報告された。 ・ベテラン教員、子ども、保護者との関係づくりが良好 ・教育現場の新任教員を「育てる」姿勢 ・教職の重要性（神聖さ） ・マニュアル化できない問題解決への多様な対応力（課題解決能力）			

開催日時	2023年9月20日（水）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	Moodle コースのデザインと小テストの基礎		
講師	斎藤智也（山口大学情報基盤センター講師）	参加者	23名
研修内容 授業におけるICTの活用は学生の参加を促すために効果的であり、山口大学においてもMoodleはそのような学習管理システム（LMS）の1つとして使用できる環境が整備されている。前半部分ではMoodleの概要と使用状況について報告があり、様々なプラグインによって多様な機能やコンテンツが実現できることや、日本の多くの大学で使用されていることが紹介された。修学支援システムとの違いは、小テストや課題の結果だけでなく行動履歴まで記録・活用できる点などにあり、その分析結果			

を個別学習支援や FD に活用する試みも見られる。後半部分では、実際の操作画面を見ながら、コースの作成、レイアウトの仕方、参加者の登録、活動またはリソース（ファイル、ラベル、ページ、小テスト）の追加と編集等について説明が行われた。小テストについては、○×問題、多肢選択問題の作成と動作設定について実演が行われ、解答欄に対して主に単語を記入してもらう記述問題、文法が必要になるタイプの穴埋め問題などが紹介された。問題バンクから問題を追加したり、ランダム出題ができたりする機能もある。一度作成したコースはエクスポートとインポートによって、年次ごとにコンテンツをコピーすることが可能である。以上のような内容の理解と実際の活用方法のイメージをもつことによって、教員の指導力向上をサポートすることができた。

開催日時	2023年12月20日（水）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	『GWE を活用する教員養成の推進』について		
講師	堤健人（山口大学教育学部講師）	参加者	66名
研修内容 学校現場は GIGA スクール構想の下で、一人一台端末を使用した個別最適な学びや協働的な学びを推進している。この新たな学びに対応するために、本学部の教員養成においてはクラウドツールを活用する指導力の育成を重要視している。そこで、学校現場での採用実績が多い Google Workspace for Education（以降、GWE）の活用例を共有する FD 研修会を設定した。 研修会では、はじめに、文部科学省の通知に記載されたクラウドツールの活用に関する方針と、教員採用試験において ICT 活用の実技を課す自治体が増加している実態を共有した。次に、本学部が考える「主体的かつ協働的な学び×クラウドツールを活用」する教員養成課程カリキュラムを参照し、「基礎的な GWE 活用スキルの習得」と「学生自身が GWE を活用する経験を蓄積する」二段階で進める方針を共有した。さらに、学部1年生がデータ科学と社会Ⅰ・Ⅱや教職概論、教職キャリア形成Ⅰ・Ⅱにおいて、どの程度 GWE についての知識やスキルを習得しているのかを、具体的な学習活動も含めて共有した。最後に、学部2年次以上で、先行して GWE を活用した講義を実践している教科教育法家庭や技術科教育法の事例を共有し、講師から各教科教育法を中心として GWE を活用する機会の設定のお願いがあった。			

開催日時	2024年1月17日（水）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	通常学級における特別支援教育について		
講師	須藤邦彦（山口大学教育学部准教授）	参加者	61名
研修内容 近年、特別支援教育を受ける児童生徒数が増加している中で、本研修では小中学校における支援学級や通常の学級における通級指導に関連した内容について講義をしていただいた。 実際、学校の規模にかかわらず一定の割合で、小中学校にも支援を必要とする児童生徒が存在し、			

特別支援教育を専門としない教員についても、児童生徒の理解や指導の仕方について知ることが求められる。その上で、特別支援としての支援計画や指導計画の遂行という部分だけではなく、誰もがそこに存在することが認められるような温かい学級経営やユニバーサルデザインの視点を含んだわかりやすい授業や環境づくり等、支援を必要とする子ども達に合わせた特別な手立てや、それを支える個別の支援の土台となるすべての子ども達に対して必要な部分について教員としてどう取り組んでいくかの具体例が紹介され、改めて考える機会が提供された。

今後、教員として採用後 10 年以内の特別支援教育を複数年経験するような方策が進められることから、大学での学びの中でもこれまで以上に、特別支援への理解だけにとどまらず、多様性やユニバーサルデザインに繋がるような学校環境への理解を深められる内容を講義の中にも織り交ぜていくことの必要性について気づく機会をもつことのできた研修となった。

開催日時	2024年2月21日（水）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	近年の教員採用試験状況と対応		
講師	浦田敏明（山口大学教職センターアドバイザー）	参加者	66名

研修内容

長年にわたり、山口大学において、教員を目指す学生の指導にあたってこられた講師に、教員採用試験や教員採用試験に向けての支援の内容などについてお話しいただいた。

「秋採用」「試験の複数回実施」など、教員不足の現状への対策として、教員採用試験の在り方に変更が加えられてきている（ただし、自治体によって、対策の取り方は一様でない）という教員採用試験の近年の動向の紹介に続き、教職を目指す学生の支援として、セミナー・研修会や教員採用試験対策講座、個別相談等で、どのような支援が行われてきているか、その実際について紹介された。自己PR文・個人面接・集団討論等に関わる具体的な支援の内容、支援を受けての学生の反応、また、支援にあたるに際しての、教職という仕事・望まれる教師の在り方・授業づくりや学級経営のあるべき姿についての講師の思い・考えも披露され、教職を目指す学生への教育にあたる教育学部教員に対して、どのような姿勢で指導に当たるべきか、具体的で、かつ、重要な示唆が得られた。

開催日時	2024年3月19日（火）	開催場所	教育学部21番教室
テーマ	「ちゃぶ台ルーム」へ行こう！（ちゃぶ台プログラムの紹介）		
講師	阿濱茂樹（山口大学教育学部准教授）	参加者	66名

研修内容

ちゃぶ台プログラムとは、平成17年度にスタートした教員養成・研修の一体化プログラムであり、毎年約15の個別プログラムに学生や教員が参加する教職プログラムである。「ちゃぶ台」の由来は、教育関係者の平等性を上座・下座のない丸いちゃぶ台で表現し、互いの実践や学びを共有し深め合う研修活動を行うことからきている。

今回は、ちゃぶ台プログラムの基本的な理念とその目的を、実際の実践例を例に出しながら紹介が

行われた。ちゃぶ台プログラムのポイントとして、学生と教員、教育機関関係者等が、立場を超えて協働し、様々な体験や活動を行うことを通して、課題解決能力やコミュニケーション能力など、「教員に必要な資質能力でありながらマニュアル化できない実践的能力」を向上させようとする研修システムであることが述べられた。

また、今後、ちゃぶ台プログラムの効果検証が計画されていることや、新たに参画する個別プログラムが募集されていることも述べられた。質疑では、授業や単位との兼ね合いも今後の検討事項であることが議論された。

(2) 教育改善

<活動内容：卒業生調査>

平成 30(2018)年度以来、新規に教員として採用された本学部卒業生とその赴任校の管理職に対する聞き取り調査を行ってきた。令和 5(2023)年度も、令和 5(2023)年 4 月に新規に教員として採用された本学部卒業生とその赴任校の管理職（各 20 名）に、卒業生には本学部教員養成カリキュラム（卒業論文・卒業研究、教育実習、授業・ちゃぶ台 PG 等）の満足度や有効性あるいは課題について、管理職には新規採用一年目の教員としての資質・能力は十分に備わっているか、改善すべき点はどこか等について聞き取り調査を行った。また、その結果を報告書にまとめ、全教員に配付した。

卒業論文・卒業研究、教育実習、授業・ちゃぶ台 PG 等に対する卒業生の評価、卒業生の状況についての管理職からの評価は、例年同様、今年度も、いずれも概ね良好であったが、卒業生からは、「教育や教科に関する理論に加え、学校現場の内情や校務分掌について学べる機会があるとよい」、「子どもと接する際の具体的な対応の仕方をもう少し学びたかった」などの指摘があり、管理職からも、教育学部での教員養成についての意見を得ている。『卒業生調査報告書』を作成し、全教員に配付し、調査結果を共有しているが、どのような形で調査を続けていくのがよいか、その結果を教育活動にどのようにフィードバックするか、検討を続けていく必要がある。

<活動内容：学生授業評価・教員授業自己評価>

1. 概要

令和 5（2023）年度の教育学部の授業について、学生授業評価・教員授業自己評価を実施した。

2. 結果

図 1 は過去 11 年間の教育学部の学生授業評価・教員授業自己評価の実施率である。学生授業評価実施率はやや減少しているが、教員の授業評価実施率は、令和 4(2022)年度から大きく上昇し、改善が見られた。

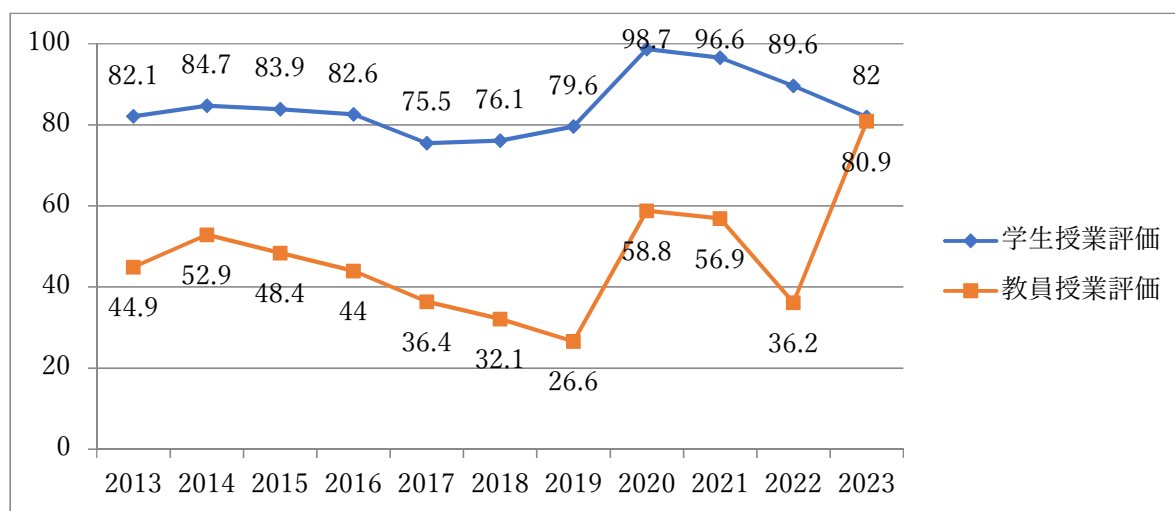


図 1 授業評価実施率の経年変化

図 2 は、令和 3(2021)年度～令和 5(2023)年度の教育学部学生の授業外学習時間を調査した結果である。授業外で 2 時間以上学習時間を確保した学生の割合は、昨年度とほぼ同様であった。

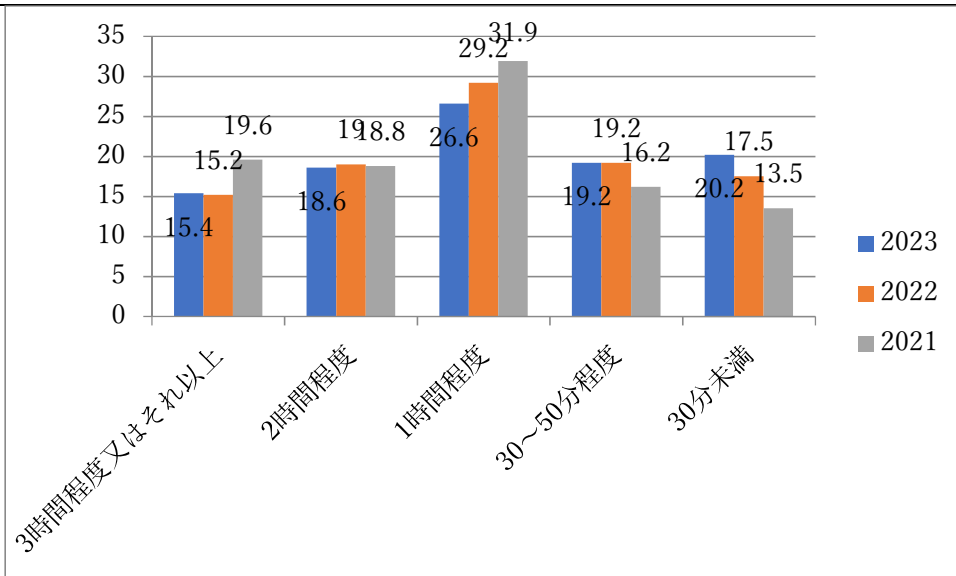


図2 授業外学習時間

3. 課題

令和 5(2023)年度は、教員授業評価の実施率が上昇したが、引き続き授業評価の意義を説明し、授業評価の実施率をさらに向上させる取り組みが必要とされる。授業外学習時間の確保についても、留意していく必要がある。

< 3. 経済学部 の FD >

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2023 年 4 月 19 日 (水)	開催場所	経済学部第 1 第大講義室
テーマ	科研費採択者報告会		
講師	寺地 伸二 本学部研究推進室長	参加者	40 名

研修内容

1. 本研修の趣旨

本学における F D の定義として、絹川正吉＝館昭編著『学士課程教育の改革』(東信堂、平成 16 年)が F D 活動の例として示すその第 9 に「教員の研究支援」を掲げている。そこで、本学部は 2018 年度から継続して科学研究費獲得のための F D 研修会を実施している。

2. まず寺地研究推進室長が昨年度の応募状況・採択状況等の資料に基づき現状報告を行い、本年度科研費獲得者の 5 名がそれぞれの研究の紹介と自身の申請の長所等を披露し、残念ながら選に漏れた教員の今年度の奮起を期するに十分であった。



開催日時	2023 年 5 月 18 日	開催場所	オンライン
テーマ	ポストコロナ時代における F D 活動について		
講師	中村 美紀子 本学部 F D コーディネーター	参加者	10 名
研修内容 1. 本研修の趣旨 本研修は一つの研修会として独立したものではないが、本学部が主催者として香川大学、長崎大学、大分大学を併せて四大学の経済学部長及び事務長会議の重要な一部分として形成されたものである。 昨今、「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」や「教学マネジメント指針」等を通じて学修者本位の教育への転換が求められている。また、新型コロナウイルス感染症が収束に向かう中、対面を中心とした授業に戻っているが、コロナ禍を機に取り組んだ遠隔・オンライン授業などのデジタル化の流れを取り入れながら、授業をより質の高いものにしていく必要がある。 そこで、ポストコロナ時代における F D 活動について、前述三大学経済学部長及び事務長に各大学の F D 体制、現在の取り組みや今後の展開について意見交換が行われた。 2. 成績評価におけるルーブリックの活用法、成績評価分布の検証等について話し合った。特筆すべきは、認証評価における F D の取扱いが評価機関によって異なること、メンタルヘルスに関連してアンガーマネジメントを F D 活動の一環としている大学もあったことである。 3. 本学部からの出席者は学部長、副学部長、事務長並びに評議員であり、学部 4 役を構成するメンバーである。普段ほとんど触れることのない他大学経済学部の F D 推進体制や個別の同活動の情報を得ることはとても有益であり、これによって本学部取組みの先進性のようなもの、全学の先見性に富むサポートが備わった F D 体制の盤石さを客観的に見つめ直すことができた。学部執行部の今後の F D 活動へのモチベーションを上げるに十分であり、その後の教育改善教学 I R へ繋がったものであった。			

開催日時	2023 年 7 月 19 日	開催場所	経済学部 第 1 大講義室
テーマ	基盤（B）採択に至る道程		
講師	加藤 真也 観光政策学科准教授	参加者	50 名

研修内容

1. 本研修の趣旨

本学におけるFDの定義として、絹川正吉＝舘昭編著『学士課程教育の改革』（東信堂、平成16年）がFD活動の例として示すその第9に「教員の研究支援」を掲げている。そこで、本学部は2018年度から継続して科学研究費獲得のためのFD研修会を実施している。採択体験を聞く本研修はその一部分を構成するものである。

これは、昨今の大学を取り巻く厳しい財政状況のなか研究活動を継続していく上で、科研費獲得の重要性はこれまでになく高まっており、大学全体で科研費への申請件数並びに採択率を上げていくことは全学においても取り組まれていることであり、本学部は全学と心を一にしている証左といえよう。

2. 基盤研究（B）採択者である加藤准教授の採択に至る前段階・下準備から実際の申請書作成の工夫・秘訣を聞くことができたことは、質疑応答も活発になされたことから、惜しくも選に漏れた教員の翌年度申請に向けてのモチベーションを上げるに十分なものであった。



(2) 教育改善

<活動内容：教学 I R>

1. 趣旨

教育・学生支援機構教学マネジメント室サイトは、教学マネジメントを支える教学 I R の構築として F D 活動が教学 I R を構築すると謳っている（閲覧 2024 年 1 月 31 日）。

そこで、教学マネジメント室による 2023 年度全学 F D 研修会で示された「山口大学の共学 I R」のデータを用い、同研修会講師・藤本正己先生の分析を参考にしつつ、本学部教学 I R を実施した。

2. 概要

- ①実施日時：第 1 回 2024 年 1 月 17 日
第 2 回 2024 年 2 月 21 日
第 3 回 2024 年 3 月 4 日

- ②実施場所：経済学部 第 1 大講義室

- ③研修テーマ：第 1 回 本学部における学生の学習時間についての調査結果とその改善への示唆他
第 2 回 本学部におけるオンライン授業の総括他
第 3 回 本学部生の大学教育を通じた知識や能力の修得、外国語を使う能力について

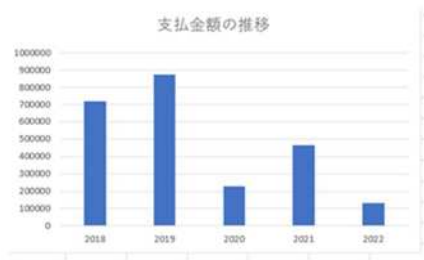
- ④講師：中村 美紀子 本学部 F D コーディネーター

- ⑤参加者：第 1 回 45 名、第 2 回 46 名、第 3 回 45 名

- ⑥研修内容：上記のテーマについて、教学マネジメント室より示されたデータばかりでなく、学部独自のデータを元に、moodle3 のアンケートシステムを駆使して参加者の意思を確認しつつ意見を吸い上げ、それぞれのテーマにおける学部構成員の一定の方向性の共有に到達できた。

- ⑦本学部オリジナルデータ

経済学部 コピー用紙の支払金額の推移



2023年3月（22年度）本学部卒業生の TOEIC 得点分布との比較



＜ 4. 理学部の FD ＞

（ 1 ） 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2024 年 2 月 14 日（水）	開催場所	理学部 1 号館第 2 2 番講義室
テーマ	障害等のある学生への「合理的配慮」-対応例から見る調整のポイント-		
講師	岡田菜穂子（学生支援センター・准教授）	参加者	50 名
研修内容 障害をもつ多様な学生に対する授業や評価に関する「合理的な配慮」と、このような学生たちに対応する上での教員側の心構え、などについて具体例を踏まえて講演をしていただいた。 日常的に多様な学生への対応で理学部構成員全員が試行錯誤していることもあり、多くの参加があった。質疑応答の時間には、障害学生への具体的な対応方法や考慮すべき範囲を踏まえた学生指導の方法などについて、多くの質問があり、それぞれの質問について講師から丁寧な説明をいただいた。理学部教員にとって非常に有意義な機会となった。			

開催日時	2024 年 3 月 13 日（水）	開催場所	理学部 1 号館第 2 2 番講義室
テーマ	就職活動・インターンシップの新しいカタチ		
講師	平尾元彦（学生支援センター・教授）	参加者	31 名
研修内容 近年、多様化する就職活動の実態について各種事例および学生支援センターのサポート体制について紹介いただいた。各企業が準備する長期間・短期間のインターンシップの例や、就職活動を進める学生に対する対応の仕方など、学生指導に関わる教員にとって具体的な説明をしていただいた。 多様化している就職活動の形態について、多くの教員が日常的に学生への指導や、授業欠席時の配慮などをどのようにすべきか試行錯誤している。そのため、質疑応答の時間には、就職活動のスケジュールと授業が重なる場合に学生が相談があった場合、どのように指導すべきか等、具体的な質問が多くあり、それぞれについて講師から丁寧な説明をいただいた。理学部教員にとって非常に有意義な機会となった。			

(2) 教育改善

<活動内容：授業公開（ピアレビュー）（数理科学科）>

(1) 授業名「数理科学発展セミナー幾何系」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年12月4日（月）10:20－14:20
- ② 対象学生：数理科学科3～4年生
- ③ 授業概要：少人数のグループに分かれ、教員の指導に従って数理科学学習を深化・発展させる。授業はセミナー形式で行われる。
- ④ 授業担当教員：寺本圭佑
- ⑤ レビュアー：宮澤、只野

2) レビュー結果

- ① 概要：
 - (ア) 発表中・後に内容に関する質問、既修得事項の確認、説明等が丁寧かつ適切な指導が行われていた
 - (イ) 発表者以外にも声をかけるなどして、活発な意見交換が行われる工夫がなされていた
 - (ウ) 今回発表者の1人が適切な解答を示せなかったことで、理解させるために少し時間を割き過ぎたかもしれない
 - (エ) 時間の制約により細かな説明がしばらく箇所も丁寧に指導されていた

(2) 授業名「数理科学発展セミナー解析系」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年12月4日（月）10:20－14:20
- ② 対象学生：数理科学科3～4年生
- ③ 授業概要：少人数のグループに分かれ、教員の指導に従って数理科学学習を深化・発展させる。授業はセミナー形式で行われる。
- ④ 授業担当教員：廣澤史彦、小杉千春、幡谷泰史
- ⑤ レビュアー：廣澤、小杉、幡谷（相互レビュー）

2) レビュー結果

- ① 概要：
 - (ア) 発表担当でない学生からのアドバイスの時間が十分に設けられており、発表担当以外の学生にも技能・表現を身につける授業となっていた
 - (イ) 一方でより人数が少なければ(現在の2/3以下)より積極的に参加できると思われる

(3) 授業名「数理科学発展セミナー代数系」

1) 概要

- ① 実施日時：令和6年1月29日（月）10:20－14:20
- ② 対象学生：数理科学科3～4年生
- ③ 授業概要：少人数のグループに分かれ、教員の指導に従って数理科学学習を深化・発展させる。授業はセミナー形式で行われる。
- ④ 授業担当教員：南出 真
- ⑤ レビュアー：菊政、塚本

2) レビュー結果

- ① 概要：
 - (ア) 発表の中に現れた概念の例を問うなど、理解を深める質問がなされていた理解不足の箇所を的確に見つけ、自ら理解を促す働きかけがなされていた
 - (イ) 発表者だけでなく、運営分担も行うことにより、参加意識と運営理解の向上を図ることができた
 - (ウ) 聴講態度に問題がある学生がおり、指導教員からの指導の必要性を感じた

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）（物理・情報科学科 物理学コース）＞

(1) 授業名「物理と情報のための応用数学Ⅳ」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年10月20日（金） 10:20 – 11:50
- ② 対象学生：物理・情報科学科2年生
- ③ 授業概要：基本的な常微分方程式・偏微分方程式とその応用、フーリエ級数・フーリエ変換、について学習する。
- ④ 授業担当教員：元木業人
- ⑤ レビュアー：木内，村藤，浦上，廣澤，白石，坂井，野崎

2) レビュー結果

- ① 概要：全体的に分かりやすい授業である
- ② 優れている点：
 - (ア) 事前に「不完全ノート（空欄付きノート）」を配布していることは学生の授業理解度向上に効果的である。
 - (イ) スクリーンに空欄付のスライドを投影し、講義中にそれに加筆しながら進める工夫はとてもよい。
 - (ウ) スライドがよくできていて説明がわかりやすかった。
 - (エ) 話し方，声の大きさもちょうどよい。
 - (オ) 応用例で電波天文学の話を使っていたのはよかった。
 - (カ) 演習の解説は十分に説明がなされていた。
 - (キ) 丁寧にわかりやすく、メリハリをつけて話していた。
 - (ク) スライドの見せ方にも工夫がされていた。
 - (ケ) 単にスライドで説明するだけではなく、穴埋め形式にしている方式は良い。
- ③ 気付き：
 - (ア) 手書きの加筆の部分が（解像度が原因）少し小さくて学生から見にくいときがあった。
 - (イ) スライド形式なので説明がやや速いような気がした。（授業時間が30分程度余っていたので、時間をまるまる使う程度の速さでちょうどよいのではないか。）

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）（物理・情報科学科 情報科学コース）＞

(1) 授業名「論理学」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年11月2日（木） 14:30 – 16:00
- ② 対象学生：情報科学分野2年次配当科目
- ③ 授業概要：情報科学の基礎となる論理学と集合について学び、演繹による推論法を修得することを目指す。
- ④ 授業担当教員：野崎隆之
- ⑤ レビュアー：中内伸光

2) レビュー結果

- ① 概要：全般的に、「豊富な例」と「気配りのある注意」が提供され、聴講する学生に分かりやすい内容となっていて、非常に準備された授業内容と思われる。授業時間全体で、学生に語りかけるような形で、授業が進められていて、学生にとっても、受講しやすい授業となっている。授業終了後に、質問に来る熱心な学生もいたようなので、授業担当者の意図は、学生に十分に伝わっていると思われる。
- ② 優れている点：
 - (ア) 授業の最初に、その日の内容の「位置づけ」や「全体像」が述べられて、聴講しやすい導入部が与えられていた。
 - (イ) 授業中に口頭で付け加えた例も含めて、例が豊富に挙げられていて、理解しやすい工夫がなされている。
 - (ウ) 「注意」という形で、「かゆい所に手が届く」ような親切な対応がなされていて、学生がつまずきそうなところをサポートする工夫がなされている。
 - (エ) プロジェクターシートの色使いが見やすい内容で、赤字の強調も効果的に使われていて、見やすいシートになっている。「色使い」というのは、長時間凝視するシートには、案外、重要な要素になっている。
 - (オ) 授業の最後に「まとめ」があって、授業を振り返って、重要なところは何かを受講学生に印象付けることに成功している。
- ③ 気付き：
 - (ア) 情報科学では「自然数に0（ゼロ）を入れる定義を用いること」は、情報科学を専攻する学生にとっては重要と思われるので、もう少し強調しておいても良かったかもしれないと感じました。
 - (イ) 専門的な記号の読み方については、口頭で述べただけだったので、板書か、あるいは、プロジェクターシートに記載があった方が、受講学生にとって、親切だったように思われます。
 - (ア) プロジェクターシートに訂正があった場合は、口頭だけでなく、訂正を板書してあげた方が、学生にとっては親切かもしれません。

<活動内容：授業公開（ピアレビュー）（生物学科）>

(1) 授業名「定量生物学」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年10月16日（月） 10:20 - 11:50
- ② 対象学生：生物・化学科、生物コース2・3年生（48名）
- ③ 授業概要：定量生物学では初回の講義で、シラバスに従って15回の講義内容や授業方針（パワーポイントを用いた講義、講義資料の配付、レポートの提出の仕方、講義の心得など）について説明をし、授業の到達目標を伝えている。また、定量生物学の考え方、捉え方を概説し、2回目以降の授業を受ける準備を行っている。10月16日の授業では、細胞内要素の数と量について解説した。
- ④ 授業担当教員：原 裕貴
- ⑤ レビュアー：工藤愛弓、岩楯好昭

2) レビュー結果

- (ア) 1回目に出した課題の学生個々の解答を、学生同士で話し合わせ、グループとしての解答を導出させた。これにより、知識の蓄積だけでなく、学生間で議論する訓練になり、良い工夫だと考えられる。
- (イ) 前回の課題の解答後、今回の授業に入る。今回の授業では細胞の構成要素についての内容であった。細胞の構成要素の解説を単に行うだけではなく、受講生の座席を回っていき、構成要素を答えさせており、学生に意識をもたせる気配りがなされており、非常に効果的に知識の拡充ができると考えられる。
- (ウ) 授業の内容では、細胞の中の分子の濃度から考えられる数、細胞内の分子の混み合い具合を、学生に実際に計算させていた。これにより学生は具体的に細胞の中の様子をイメージすることができるようになる。
- (エ) 総じて、本授業では教員が教壇の上で講義を施す方法にとどまらず、学生参加型の授業方式といえる。居眠りする学生もおらず、今後もこの方式で授業を行っていくことで、学生の学習効果が得られる。
- (オ) はじめに少人数のグループに分け、講義内で行われる課題に関する議論をスムーズに行うための自己紹介などが行われた。
- (カ) 前回の課題について、グループで意見を交換する時間が設けられていた。異なる分野（生物、地球圏など）の学生間で意見を交換させることによって、異なる側面から考えられた意見のやり取りができ、課題の解決方法が複数あることを学生に認識させる上で有効であった。また、議論を行うことで、学生が考えた回答をブラッシュアップできる点も正しい知識の定着に効果的であると感じた。
- (キ) 学生に議論後の意見を発表させ、それに対して原先生が要点をまとめて全体に共有させていた。また、どのような観点がよかったかについて講評を行い、学生のモチベーションを向上させる工夫がなされていた。
- (ク) パワーポイントファイルを用いて、細胞の構成要素のサイズと数に関する講義が行われた。イラストや写真などを多用しており、文字は簡潔で分かりやすかった。パワーポイントファイルは学生に事前に配布されており、講義途中でも前のスライドに戻り、参照できるようになっていた。
- (ケ) 時事問題（コロナウイルス）や身近な例を取り上げることで、学生が講義内容を身近に捉えられるようにしていた。
- (コ) ある程度の時間考えさせるような課題の場合には、学生の座席の間を歩き回り、適宜コメントすることによって、学生の集中力維持に努めていた。
- (サ) 講義で扱われていた細胞の大きさやその中に含まれる生体分子数は、一見するとイメージしづらいが、普段用いるスケールに置き換えた例（コップ一杯など）を用いることで、学生がイメージしやすいように工夫されていた。
- (シ) 概要や計算例を説明した後に学生に実際にイラストを描かせたり、計算をさせたりするなど実習的な要素も取り入れることによって、内容がより定着しやすいように工夫されていた。

<活動内容：授業公開（ピアレビュー）（化学科）>

(1) 授業名「データサイエンス技術Ⅱ」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年7月25日（火） 10:20 – 11:50
- ② 対象学生：化学科 科学コース1年生必修科目（40名）
- ③ 授業概要：教師なし学習の主成分分析および因子分析について説明
- ④ 授業担当教員：谷 誠治
- ⑤ レビュアー：村藤俊宏、安達健太

2) レビュー結果

- ① 概要：
 - ① 多変量解析手法である主成分分析と因子分析に関して、数値データを量的に評価し分類する方法を演習形式を交えながら学んでいく。
 - ② 教師なし学習の主成分分析および因子分析について、指定教科書とともに、事前配布資料を使って効率的に進行している。
- ② 優れている点：
 - ① 主成分分析について、主成分の意味合いについて丁寧に説明されており、理解しやすい。
- ③ 気付き：
 - ① 実際に主成分分析および因子分析を行うことを想定すると、データ前処理についての知識が必要である。とくに主成分分析においては、データの重み付けの理解が必要である。
 - ② 主成分分析および因子分析には、線形行列の知識が必要である。実際に変換行列を作ってみるなどの演習があれば、より良い理解につながるかもしれません。
 - ③ 主成分分析にて、スコアプロットとローディングプロットの見方（解釈の仕方）はとても重要なので、もう少し時間を掛けても良いのではないかと感じた。（学生に課題として課すものアリかも知れません）
 - ④ 理学部化学科の学生対象ということで、化学実験データ（スペクトルデータなど）用いた演習があれば、多変量解析理解が容易になり、学生の知識定着率が更に良くなるのではないかと。

(2) 授業名「分析化学実験」

1) 概要

- ① 実施日時：令和6年1月19日（火） 12:50 – 16:00
- ② 対象学生：化学科 科学コース2年生必修科目（41名）
- ③ 授業概要：「分析化学実験」は、化学科2年生の専門・選択必修科目である。化学を学んでいく上で必要となる分析化学に関して基礎的な実験操作を身につける。そのため、原則として1人で実験を行い、操作や器具の取り扱いについての一定の技術を身につけるべく反復して練習する。

当日の授業内容：2から3人のグループに分かれ、以下の実験を行う。

- ・ エチルバイオレット吸光光度法による陰イオン界面活性剤の分離・定量
- ・ 誘導結合プラズマ発光分光分析法による水道水中の金属イオンの一斉定量分析
- ・ イオン選択性電極法による飲料水中のフッ化物イオンの定量
- ・ 高速液体クロマトグラフィーによるカフェインの分離・定量

到達目標：以下のような目的を設定している。

- ・ JIS法に記載されている公的分析法を体験し、技術を習得する。
- ・ 様々な分析実験で用いられる器具の使い方を体験し、技術を習得する。
- ・ 最先端の分析機器の操作を体験し、その原理について理解する（考察事項）。
- ・ 実測されたそれぞれの物質の濃度について考察する（考察事項）。
- ・ 物質を分離するメカニズムについて理解する（考察事項）。

- ④ 授業担当教員：安達健太、鈴木敦子

- ⑤ レビューアー：川俣 純、藤井寛之、上條 真
- 2) レビュー結果
- ① 概要：非常に高い評価が得られている。
- ② 優れている点：
- ① 講義内容については、「化学科の学生に必要な専門性を身に付ける良い内容になっている」、「様々な分析器具や高額な分析装置を利用した実験内容になっている」、「専門教育の一環の分析化学実験を行なっている」、「実験手順は実験に先立ちプリントアウトしたものが配布されているようで、それらを参照しながら実験に取り組んでいる様子が見られる」、「実験室周辺に学内 WiFi が完備されているようで、学生自らネット検索などを駆使し各自パソコンで実験データをまとめつつ実験作業を進めている点が特に良いと感じる」などの意見が出た。
- ② 授業の進行については、「各テーマ毎に TA を配置し、学生をフォローしている」、「事前に予習すべき内容が伝達されており、学生はスムーズに実験を行なっている」、「配布しているプリントに加え実験室のホワイトボードに課題などが明確に書かれており実験をスムーズに進められるように工夫されている」、「研究室配属後に学生が自主的に研究に取り組む様子が体験できるように授業計画が練られているように感じた」などの高い評価が得られている。
- ③ 気付き：
- ① 保護メガネを付けずに実験をしている学生も見受けられる。
- ② TA を含め実験室内では必ず保護メガネを着用するようにすべきではないか。
- ③ 学生への指示伝達がホワイトボードと旧時代的であるように感じる。PC画面を映写できるモニターやスクリーンを設置するなど、デジタル化を進めるべきではないか。(PC を利用して実験操作などの動画を学生に見せることができる)

<活動内容：授業公開（ピアレビュー）（地球圏システム科学科）>

(1) 授業名「地球科学実験ⅡA」

1) 概要

- ① 実施日時：令和5年10月6日（金） 12:50 - 16:00
- ② 対象学生：地球圏システム科学科 2年生（約30名）
- ③ 授業概要：学生実験室・実習室での簡単な説明の後、簡易測量技術の復習を大学構内の屋外で実施する（雨天決行）
- ④ 授業担当教員：岩谷、大和田、川村、坂口
- ⑤ レビュアー：地球圏システム科学科教員

2) レビュー結果

- ① 概要：以下5項目について意見を集約。どの観点においても高い評価を得られていた。
 (ア) 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、野外教材・案内資料の利用など）
 (イ) 授業運営・授業構成に関して（難易度・過不足など）
 (ウ) 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して
 (エ) 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）
 (オ) 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

3) その他：以下の9項目について学生へ履修後に授業アンケートを実施し、表1のような結果を得ることができた

- (ア) 自分自信が考えるこの授業の学習達成度はどのくらいですか。 1. 30%未満
2. 30-50%未満 3. 50-70%未満 4. 70-90%未満 5. 90%以上
- (イ) この授業の内容に興味をもてましたか。 1. もてなかった 2. 少しだけ持てた
3. どちらともいえない 4. もてた 5. 非常に持てた
- (ウ) 話し方はききとりやすかったですか。 1. はい 2. いいえ
- (エ) 黒板の字やプロジェクターの字は読みやすかったですか。 1. はい 2. いいえ
- (オ) 教え方（説明の仕方）はわかりやすかったですか。 1. はい 2. いいえ
- (カ) 質問をする時間は十分与えられましたか。 1. はい 2. いいえ
- (キ) 質問、疑問に対して適切な対応がなされましたか。 1. はい 2. いいえ 3. 該当事項なし
- (ク) 私語等への注意は適切になされましたか。 1. はい 2. いいえ 3. 該当事項なし
- (ケ) 野外の授業（実習）の利点と問題点について、気づいたことを述べて下さい。

表1. 授業アンケートの回答評価（各回答番号を選択した人数）

質問事項	1	2	3	4	5
(ア)	0	2	10	10	4
(イ)	0	2	1	15	9
(ウ)	27	0			
(エ)	14	9			
(オ)	26	1			
(カ)	27	0	0		
(キ)	17	0	10		
(ク)	5	1	21		
(ケ)	自由記述				

< 5. 医学部の FD >

医学科

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2023 年 4 月 18 日 (火) 17 時 00 分	開催場所	第 3 講義室
テーマ	教育主任説明会「共用試験 OSCE 公的化」に伴う実施体制及び認定評価者制度の説明		
講師	医学教育センター	参加者	45 名

研修内容

2023 年度から公的化された医学生共用試験臨床実習前 OSCE について、公的化の経緯及び各大学で実施する OSCE 試験に求められる対応について説明が行われた。

特に、試験の評価を行う内部評価者について、医療系大学間共用試験実施評価機構主催の認定講習会を受講する必要がある、本学において試験を実施するにあたり、講習会の受講を含めた評価者の確保の重要性の説明が行われた。



図1 説明会ポスター



図2 会場の様子

開催日時	2023 年 6 月 13 日（火） 17:00	開催場所	第 1 講義室
テーマ	医学教育モデル コア カリキュラム 令和 4 年度改訂版 学内説明会		
講師	医学教育センター	参加者	45 名

研修内容

令和 4 年に公表された医学教育モデル・コア・カリキュラムについて、令和 6 年 4 月からの運用開始に伴う医学部医学教育総合電子システム（eYUME）の更新について説明が行われた。

改訂されたモデル・コア・カリキュラムの基本方針や変更点、本学のカリキュラム及び eYUME の対応方法について説明が行われた。また、新規学修目標に対応する講義・ユニットの編成、学習方略と評価方法の確認及び明記をすることの依頼が行われた。



図 1 説明会ポスター



図 2 会場の様子

まとめ ～新コアカリへの対応、主な取り急ぎ～

1. 各講義に対応するコアカリ番号の変更
新番号への置換、追加や削除も
2. 新規学修目標に対応する講義・ユニットの編成
3. 学修方略・評価の確認・明記
4. 診療参加型臨床実習の促進
※共用試験OSCE・CBTの公的化
①学生が行う医業・患者同意
②各診療科における実習期間のリバランス
③評価方法の検討

随時ご相談いたしますので、よろしくお願いします。

図 3 資料（抜粋）

開催日時	2023 年 9 月 19 日（火） 17:00	開催場所	第 2 講義室
テーマ	新任教職員オリエンテーション ～今、求められる医学教育とは!～		
講師	医学教育センター	参加者	14 名

研修内容

新任教職員を対象として、医学教育の現状と課題、国家試験の現状について基本的な解説がなされた。その後、全国共通の課題として行われる医学生共用試験（CBT・OSCE, Post-CC OSCE）について、公的化された経緯及び制度の変更点について説明が行われた。また、本学における診療参加型臨床実習の構成やログブックを用いた学生による自己評価及び指導医評価の説明が行われ、医学教育への協力依頼があった。



図 1 F D研修会ポスター



図 2 会場の様子

開催日時	2023 年 12 月 19 日（火） 17:00	開催場所	第 1 講義室
テーマ	令和 6 年度シラバス説明会		
講師	医学教育センター	参加者	46 名

研修内容

医学部医学科では、山口大学医学教育総合電子システム(eYUME: electronic system of Yamaguchi University Medical Education)を導入し、全ての授業内容を電子化したシラバスで公開し、卒前の医学教育内容に関する一大データベース兼学修リソースとして活用している。授業毎に身に付けるべき“学修目標”を設定し、eYUME に掲載するとともに、学生は、講義の都度、設定された“学修目標”をどの程度身に付けることができたかを自己評価している。授業担当教員は学生が評価した結果を閲覧することができ、講義や実習の向上に活用している。

FD 研修会では、改訂されたモデル・コア・カリキュラムへの対応を含めた次年度のシラバス更新に関する説明を行うとともに、学生の修学状況の確認やシステムの活用方法を確認し、意見交換を行った。



図 1 会場の様子



図 2 資料の抜粋

開催日時	2024 年 2 月 20 日 (火) 17:30	開催場所	第 2 講義室
テーマ	医学教育と OSCE について考える		
講師	千葉大学 伊藤彰一 教授	参加者	54 名

研修内容

モデル・コア・カリキュラム改訂によるアウトカム基盤教育（到達すべき目標を明確にし、これらの目標を達成できる教育の提供）の推進のため、教育の在り方、学生へのサポートや教育環境、学生への評価方法の重要性について講演会を行った。

学習評価の概念や考え方、ポートフォリオによる評価を学生へフィードバックを行うことにより学生の強みや弱みを明確にし、アウトカムへ導く評価方法等について講演があった。一方、ポートフォリオを用いることの難しさについても言及がなされ、総括的評価としての臨床実擬試験（OSCE）の歴史と今後の展開について解説があった。

見学型臨床実習から診療参加型臨床実習への導入の経緯、医師法の改正による医師養成課程の見直し等についても言及があった。



図 1 FD 研修会ポスター



図 2 会場の様子

(2) 教育改善

＜活動内容：医学部医学科FD研修会及び医学部医学科教育プログラム評価委員会＞

○医学医学科FD研修会（令和6年度シラバス説明会）

日時:令和5年12月19日(火)17時～18時

場所:医修館1階 第1講義室

医学部医学科では、山口大学医学教育総合電子システム(eYUME: electronic system of Yamaguchi University Medical Education)を導入し、全ての授業内容を電子化したシラバスで公開し、卒前の医学教育内容に関する一大データベース兼学修リソースとして活用している。授業毎に身に付けるべき“学修目標(コアカリ)”を設定し、eYUMEに掲載するとともに、学生は、講義の都度、設定された“学修目標(コアカリ)”をどの程度身に付けることができたかを自己評価している。授業担当教員は学生が評価した結果を閲覧することができ、講義や実習の向上に活用している。

FD研修会では、シラバス更新に関する説明を行うとともに、学生の修学状況の確認やシステムの活用方法を確認し、意見交換を行った。

○医学部医学科教育プログラム評価委員会

日時:令和5年3月25日(月)17時～18時

場所:医修館本館6階 第2会議室

※報告事項・協議事項は別紙のとおり

医学科において収集したデータに基づき、教育プログラムの効果及び適切性を評価する教育プログラム評価委員会を開催した。医師国家試験や共用試験における成績比較、eYUMEにおける評価結果、医学教育センターで行ったアンケート(成績評価と担任制)及び全学で実施されたアンケート結果について確認を行った。

委員会において、委員より下記の意見があった。

- ・担任制の稼働率が低いのが気になる。担任でない学生が教室に来て相談する機会もあるので、それもカウントできれば稼働率が上がるのではないかな。
- ・特別枠や地域枠の学生については、医療人育成センターや医学教育センターが個別に面談を行っているので、そのような学生を網羅できれば面談の稼働率が上がるのではないかな。
- ・卒業生アンケートの回答率が低いのが気になるが、同窓会を通じても回答がないことが多いため、卒後のアンケートは難しい。
- ・これからの卒業生に新たに配付する山口大学のアカウントを利用して、なんとか卒業生に回答してもらえるように努力する必要がある。

(報告事項)

報告1 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会規則

報告2 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会委員

(協議事項)

協議1 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会規則の改正(案)について

【総括的評価】

協議2-1 第117回医師国家試験 合否別の各試験における成績比較(平均点±標準偏差)

協議2-2 第117回医師国家試験 学内成績レポート

協議2-3 第115回～第117回医師国家試験 問題別正答率全国比較

協議2-4 山口大学と全国のCBT得点率の年次推移

協議2-5 共用試験OSCE 山口大学と全国の評価点 推移

【形成的評価】

協議3-1 令和4年度 eYUME 学生講義評価「当授業の“学修目標”は身に付きましたか」に対するユニット別回答(コアカリ上の学修目標)

協議3-2 令和4年度 ユニット評価結果(到達目標)

協議3-3 臨床実習の到達目標のオンライン自己評価集計 過去3年間(2021(令和3)年度～2023(令和5)年度)の比較

協議3-4 山口大学能力基盤型カリキュラムシステム(Yamaguchi University CompetencyBased Curricular System)YU CoB CuSについて

【総括的評価と形成的評価の評価】

協議4 医学教育センターアンケート結果 成績評価(総括的評価)と担任制(形成的評価)

【全学アンケート】

協議5-1 山口大学学修実態に関するアンケート(在学生調査)(2022年度調査:学部生)

協議5-2 山口大学卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケートー卒業生・修了生調査ー(2023年度調査:2019年度学部卒業生対象)

【ディプロマ・ポリシー(DP)】

協議6 山口大学医学部医学科 ディプロマ・ポリシー(DP)の変更の進捗について

保健学科

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和5年11月14日(火) 16:00 ～16:40	開催場所	保健学科研究棟・第2研究棟
テーマ	第2回保健学科研究棟火災訓練		
講師	管理運営課施設管理係 有村 崇	参加者	40名(学生・教職員・自衛消防隊・防災センター・警備員等)
研修内容 第2回保健学科研究棟火災訓練 11月1日に役割担当者を中心とした事前説明会を実施した。 ＜実施内容＞ 保健学科において学部学生・院生・教職員を対象とした防火教育・訓練の自主訓練として、宇部中央消防署に訓練実施を届出した。通常時(平日の昼間)に保健学科研究棟3階の研究室から出火したという想定で、通報連絡・初期消火・避難誘導の訓練を実施した。 16:01 訓練火災発生(保健学科研究棟3階の感知器作動) 防災センターは、自動火災受信機を確認し放送する。 16:03 非常放送、避難開始(研究棟) 16:03 地区隊本部立ち上げ(研究棟)、地区隊本部へ出火通報 地区隊長より初期消火・応急救護所設置の指示 通報連絡班：防災センター・地区隊長に通報・連絡 避難誘導班：避難者の誘導・連絡等 応急・救護班：負傷者の応急手当、体調不良者の対応・状況報告 初期消火(消火器)開始 16:05 初期消火失敗、初期消火失敗の連絡(第一発見者)、初期消火班の到着 16:06 地区隊長より避難誘導班長に避難指示、全員避難 16:12 応急救護班による負傷者応急手当 研究棟玄関前(玄関ホール)に避難誘導 16:12 避難完了者の点呼完了、避難完了報告 16:16 (館内放送)訓練火災鎮火、初期消火・避難訓練終了 16:30 水消火器の使い方訓練 自衛消防隊地区隊長(保健学科長)挨拶、防火防災管理者講評 16:45 訓練終了 サポーター 管理運営課施設管理係 有村 崇 コーディネーター FD 委員 河野・村上			

開催日時	2023 年 9 月 29 日、17:00-18:00	開催場所	保健学科第 2 研究棟 HD1-1 講義室
テーマ	保健学科 FD 研修会「International publishing」		
講師	Teresa Stone RN RMN BA MHM PhD FACMHN, Visiting Professor, Yamaguchi University	参加者	27 名（教職員、および学生 会場 参加 22 名、Web 参加 5 名）
研修内容 論文執筆に関する FD 研修会 教員と学生を対象とした英文論文の書き方について、ネイティブの研究者より約 40 分にわたり、わかりやすく説明された。 論文を書く上での必要なエッセンスについて、具体的な手法を含めて説明があった。また、投稿するジャーナルについて、open access journal の内容や Predatory journal に注意するように説明された。 講演後には質疑応答がなされた。 事後の無記名 web アンケートでは、満足度に関しては 5 段階評価で、25 人が「3」以上の評価を付けた。その他、コメントにも好評価の意見をいただいた。			

（２）教育改善

＜活動内容：災害時の連携強化に関する取り組み＞

○保健学科における火災訓練（11 月開催）の後、防災に関する取り組みについて、話題が挙がった。特に看護学専攻においては、外部施設での実習機会が多いため、JANPU 災害連携教員である永田教授を中心としたワーキング・グループ（伊東美佐江教授（母子）、赤田いづみ講師（基礎）、村上祐里香助教（地域・老年）、高杉あすか助教（臨床））を組織し、検討を行った。

その際、医学部における危機管理マニュアルがなかったため、多くの部署との確認・調整が実施された後、「看護学専攻安否確認対応マニュアル」（案）が策定された。

2024 年 1 月以降、この「安否確認対応マニュアル」は事態が生じた場合に学務課から安否確認がされるフォームとして、看護学専攻のみでなく、保健学科内で運用されることとなった。

＜ 6. 工学部の FD ＞

（ 1 ） 学部・研究科主催 FD 研修会（教育改善 F D 研修会）

開催日時	下表のとおり	開催場所	—
テーマ	全学で実施した教育改善 FD 研修会，及び各種調査結果（在学生アンケート，卒業時アンケート，卒業生アンケート）をふまえた，学生の学修成果の修得状況の確認及び教育改善等について意見交換する FD 研修会		
講師	—	参加者	下表のとおり

研修内容

部局長会議等において，教育学生担当副学長から工学部長に，第 4 期中期目標・中期計画達成のため，協力依頼があった【教育改善 FD 研修会，及び各種調査結果（在学生アンケート，卒業時アンケート，卒業生アンケート）をふまえ，学生の学修成果の修得状況の確認及び教育改善等について意見交換する FD 研修会】の開催について，各学科・工学基礎教育に依頼し，以下のとおり実施した．

学科等名	実施日時	参加人数
機械工学科	2024 年 1 月 29 日（月）13 時 00 分～14 時 30 分	17 名
社会建設工学科	2024 年 2 月 13 日（月）14 時 20 分～14 時 50 分	20 名
応用化学科	2024 年 1 月 18 日（木）16 時 30 分～17 時 10 分	16 名
電気電子工学科	2024 年 1 月 31 日（水）17 時 15 分～17 時 25 分	19 名
知能情報工学科	2024 年 1 月 31 日（水）14 時 00 分～14 時 30 分	15 名
感性デザイン工学科	2024 年 2 月 14 日（水）15 時 40 分～17 時 00 分	15 名
循環環境工学科	2024 年 1 月 19 日（金）11 時 00 分～11 時 30 分	14 名
工学基礎教育	2024 年 1 月 24 日（水）16 時 10 分～17 時 45 分	13 名

各研修会では，教育内容（英語教育やキャリア教育，メディア授業等），教育環境（ネットワーク，学内インフラ等），学生の学習の状況（時間外学習時間等），アンケートの内容や分析結果等，様々な観点から活発な意見交換がなされていた．

なお，その研修で出た意見及び全学の教育改善 FD 研修会の動画視聴後に実施したアンケート結果についてはすべて，教学マネジメント室に情報提供した．

(2) 教育改善

<活動内容：Yu CoB CuS の導入>

令和元年度（2019 年度）から、一部の学科において YU CoB CuS を導入し、学習成果を可視化できるようにした。

<活動内容：工学教育研究センター>

工学部附属工学教育研究センターは、工学部における教育内容の充実と教職員の教育力強化を図り、山口大学の工学教育の改善に資することを目的として、2005 年 7 月に設置された。本センターは、

- (1) 先駆的な教育実践活動に関する情報収集、分析および独自の教育改善方法の提案、
- (2) 学部・大学院での教育実践活動に関するデータ分析、取りまとめおよび学内外への公表、
- (3) 長期的なセンターの維持発展のための運営体制のシステム化、

を主なミッションとして活動している。2017 年 4 月からは、本センターの組織を調査研究部門、学生ケア部門、学生教育部門の 3 部門に改組し、学生教育部門の中に「文部科学省グローバル人材育成推進事業（2012～2016 年度）」を通して実施してきたグローバル教育を継承した。3 部門のうち、調査研究部門では工学教育に関連した調査、分析、研究およびその成果公表に関する活動、学生ケア部門では工学部サロンにおける活動を中心とした学生の修学支援に関する活動、学生教育部門では修学の基礎力向上のための取り組みに関する活動を推進している。特に、学生教育部門には語学教育強化室、海外派遣支援室、数学統一試験実施室の 3 室を設置し、学生の英語力の向上、留学プログラムの運営と留学サポート、工学系数学基礎力の向上に取り組んでいる。

山口大学工学部附属工学教育センター <http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/>

<活動内容：工学部サロン>

平成 18 年度（2006 年度）から、吉田キャンパスの研究 1 号館の 1 階に「工学部サロン」を開設している。工学部サロンは、工学教育研究センターの学生ケア部門の活動である。工学部はキャンパスが離れていることもあり、工学部 1 年生のために、よろず相談が可能な場が工学部サロンである。工学部サロンには、相談員として工学部の教員 OB が待機している。長きにわたり、工学部で教育研究に携わってきた豊富な経験があり、工学部のことを熟知した教育熱心な先生方が相談に対応している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっている。月～木の 14 時～18 時 30 分（前期の月曜は 19 時）まで対応しており、曜日によって担当教員が異なっている。

山口大学工学部附属工学教育センター 工学部サロン

<http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/salon.html>

＜活動内容：ステップアップノートの配布＞

平成 23 年度（2011 年度）から、工学部の新 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布を行っており、工学部学生のポートフォリオとして利用している。

＜活動内容：学生授業評価、優秀授業表彰＞

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。令和 2 年度に学生授業評価アンケートの項目が変更されたことに伴い、授業内容の理解度と満足度を問う 2 つの項目の回答結果を利用して優秀授業が決定された。概要は以下の通りである。

- ・項目（3）あなたは、この授業の内容を理解できましたか？
- ・項目（5）あなたは、この授業について満足しましたか？

上記 2 項目の質問に対する学生の回答は、「そう思う」が 5 点、「ややそう思う」が 4 点、「どちらとも言えない」が 3 点、「あまりそう思わない」が 2 点、「そう思わない」が 1 点である。したがって、合計点が 8 点以上であれば「良い評価」、6 点以上 8 点未満であれば「概ね良い評価」と考えて良い。2 項目の合計点（Y 値）を導出する。授業評価アンケート回答数と合計点（Y 値）の相関を考慮した補正式から、補正合計点（Z 値）を算出する。この補正合計点（Z 値）を評点とし、学部授業では全開講科目数の 10%、大学院授業では 20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が 10 未満の授業は、正確な評価が期待できないので「優秀授業」の対象から除いている。

学部の「優秀授業」に関しては、学科間のバランスを考慮して、「各学科の補正合計点の上位 3 科目」と、それら以外の「学部全体での補正合計点の上位科目」を「優秀授業」として専攻している。大学院授業に関しては、創成科学研究科（工学系）全体での補正合計点の上位 20%の科目を「優秀授業」としている。また、学部授業では学部全体と各学科の補正合計点の最高点の授業を、大学院授業では各専攻の補正合計点の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

令和 4 年度（2022 年度）開講の工学部と大学院博士前期課程（工学系）の授業について、全開講授業数は、学部授業は 433 科目、大学院授業は 156 科目であった。授業評価アンケート回答数が 10 人以上の授業数は、学部授業は 286 科目、大学院授業は 32 科目であった。その中で、学部は 43 科目が表彰（内訳：最優秀授業 7 科目、優秀授業 36 科目）対象となり、大学院は 31 科目が表彰（内訳：最優秀授業 5 科目、優秀授業 26 科目）対象となった。

以前から問題とされてきた WEB 回答となってからのアンケート回答率の下落及び、評価指標が学生の内容理解、満足度なので、教授法が優れている以外の要素として、科目内容（平易かどうか）、分野間の学問体系の違いが評価値に強く依存する。また、大学院については、科目あたりの受講者数が少ないこと及び回答率の下落により、表彰制度自体が成り立たなくなっていた。

（R4 年度 31 科目／32 科目（授与率 97%）、R3 年度 23 科目／27 科目（授与率 85%）R2 年度 22 科目／44 科目（授与率 50%））

そこで、全学で来年度から始まるベストティーチング表彰制度の実施に併せて、今年度限りで工学部の優秀授業表彰制度を廃止することを決定した。

＜ 7. 農学部の FD ＞

（ 1 ） 学部 ・ 研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 5 年 7 月 19 日 13:30-14:00	開催場所	農学部大会議室
テーマ	理工系学生の就職事情 ～就職活動の概況～		
講師	佐川 直哉 氏 (株式会社ディスコ)	参加者	31 名
研修内容 株式会社ディスコの佐川直哉氏を講師に、「理工系学生の就職事情 ～就職活動の概況～」をテーマに農学部アラカルト型 FD 研修会を実施した。主な内容は以下のとおり。 1. 2024 卒就職活動状況 一般に、広報活動開始が 3 月 1 日、採用選考活動開始が 6 月 1 日、正式な内定日が 10 月 1 日である一方で、3 月以前に、50%を超える企業が広報活動を開始していること、40%程度がエントリーシートの受付を開始していること、30%程度が面接を開始していることが説明された。さらに、内定の時期は主として 3-4 月であることも知らされた。また、就職企業を選ぶ際に重視する点として、給与・待遇の良さ、が上位に位置しており、視点の変化が見られた。エントリー数も少なく、企業を絞って就職活動する傾向があると説明された。 2. インターンシップの定義変更 インターンシップの考え方が変わり、これまでは、採用活動とは切り離されていたが、今後は、採用活動に直結させることができるようになった旨が説明された。また時期は、冬休み、春休みが多く、その他、週末を利用したものも散見されると知らされた。こういった背景から、学生へのインターンシップへの参加を促して欲しいと説明された。一方で、インターンシップへ呼ばれなかった学生への配慮もして欲しい (例えば、不利に働くことはないことや個性や能力が否定されたわけではないことを伝えること) とのことだった。 3. まとめ 理工系学生の現代における就職活動の実際を知るいい機会となった。上記の点を踏まえることで、就職活動学生に対して的確に助言・指導していけると考えられる。得られた知識を今後活かしていきたい。			

開催日時	令和 5 年 11 月 22 日 13:30-14:00	開催場所	農学部大会議室
テーマ	Moodle コースのデザインと小テストの基礎		
講師	齊藤 智也 氏 (情報基盤センター)	参加者	25 名程度 (把握し忘れました)
研修内容 情報基盤センターの齊藤智也氏を講師に、「Moodle コースのデザインと小テストの基礎」をテーマに講師派遣型 FD 研修会を実施した。主な内容は以下のとおり。 1. Moodle の概要 Moodle は、オープンソースの学習管理システムで、多くの機能やコンテンツを持っていることが説明された。山口大学でも 1500 を超える科目で利用されている一方で、農学部での利用コース数は極めて少ないことが知らされた。また、操作方法が概説され、ホームページの作成やその管理と近いことが説明された。 2. Moodle の活用について 授業のコースは、自動的に作成されること、手動でも作成可能であることが説明された。特定の利用者は、情報基盤センターに申請ののち、練習用コースを作成していることが知らされた。その他、資料の掲載手順等に関して簡単に説明を受けた。加えて、コンテンツやファイルの追加、課題、小テストの設定について説明された。 3. まとめ 便利な機能である一方で、本部局では上手に活用できていないのが現状であった。申請あれば、個別に指導をしていただけるとのことで、今後 Moodle を活用することで、教育効果を上げて行けるものと考えられる。初めの一步を踏み出すには、十分な講演であったと個人的には思う。			

開催日時	令和 5 年 10 月 11-13 日	開催場所	幕張メッセ
テーマ	フィールド教育研修 (第 13 回 農業 WEEK の視察)		
講師	なし。	参加者	2 名
研修内容 本年度のフィールド教育研修では、フィールド教育における DX 関連や環境保全型農業に資する農業技術、栽培システム、農業機械などの情報収集を行った。農場技術職員である高田暁、石掛桂士 2 名が第 13 回農業 WEEK (2023 年 10 月 11-13 日、幕張メッセ) を視察し、特別セミナーの聴講、出店ブースでの企業説明などにより情報収集を行った。展示会場では、「農業資材 EXPO」、「スマート農業 EXPO」、「6 次産業化 EXPO」、「畜産資材 EXPO」、「農業脱炭素・SDGs EXPO」の 5 セクションが開催されていた。視察後、農場内で報告会の場を設け、附属農場でも問題となっている自然エネルギー活用、情報・デジタル機器の活用、作業の省力化の解決に向けて協議した。			

開催日時	令和 6 年 1 月 10 日	開催場所	農学部大会議室
テーマ	学生アンケート結果に関する意見交換会		
講師	なし。	参加者	8 名
研修内容 各種学生アンケート (在学生アンケート, 卒業時アンケート) 結果を踏まえた意見交換会を実施した。下に, 在学生, 卒業時, 課題, に分けて概要を記す。 1. 在学生 アンケート回答者が 105 名。授業時間以外に, 授業に関する勉強をしている時間に関して議論され, 3 年次以上になると全く勉強しない学生がいなくなっており, 研究室活動を反映した結果であると考えた。個人的には, 3 年次終了時までには研究室配属する点は, 前述の点において効果的に働いていると考えており, 継続するべきと思っています。 キャリア形成については, アンケート回答者が 15 名。専攻分野と仕事内容の関係において, 専攻した専門分野と大いに関連があるが 0%であることや, 仕事の職種が事務職が最も多かった (38.5%) 点に関して, 前年度以前のものと比較して大きな相違が見られることから, アンケート回答者に偏りに起因したものではないかという意見が出た。 2. 卒業時 アンケート回答者が 36 名。文理横断型の学習に役立つ授業を履修する機会がありましたか, に対する回答が比較的満足度が高い様子であった。これは, 農学部の特徴として主張できるのではないかという意見が出た。もっと伸ばしていきたい。一方で, 外国語を使う能力の修得に課題が見られる。課題の具体は何か (例えば, 表現することが苦手等), を知る必要性があるとの意見が出た。また, 習得を促進する方法として, 留学生との交流の場を積極的に設けることでスピーキングにおいては, 上達が見込めるのではないかと, といった意見が出た。さらに, 英語の FD を行うことや英語の YouTube を視聴すること, (現在研究室に依存している) 専門英語の科目を充実されることも教育効果向上に貢献するのではないか等の意見が出た。その他にも, 学部独自のアンケートを実施し, 学生の声を集積することで, 教育内容やカリキュラムの変更につなげていけたら, といった意見が出た。 3. 課題 アンケート回答者数の増加が必須。5-40%の回答率のもので議論するのは, 偏りを生む可能性があるため, アンケート回答率の向上を可能にする仕組みの確立が望まれる (例えば, 必修にする等), といった意見が出た。			

(2) 教育改善

<活動内容：授業公開 (ピア・レビュー)>

1. 生物資源環境科学科の授業公開

生物資源環境科学科では、「生物資源環境科学セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピア・レビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員同士の意見交換が活発に行われた。以下、本年度に実施した2回の公開授業を記す。

- (i) 画像解析による植物モニタリング -AI 画像解析とファンクショナルイメージング-
日時: 令和5年5月31日(水) 15:30-16:30 荊木 康臣 先生
- (ii) レンコン腐敗病菌 *Fusarium commune* の特徴および防御に関する研究
日時: 令和5年7月13日(木) 17:00-18:00 佐々木 一紀 先生

2. 生物機能科学科の授業公開

生物機能科学科では、「生物機能科学セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピア・レビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員同士の意見交換が活発に行われた。以下、本年度に実施した5回の公開授業を記す。

- (i) トマトの話
日時: 令和5年4月28日(金) 16:00-17:00 松井 健二 先生
- (ii) 高効率の光合成を担う C4 植物の細胞特異的な機能分化
日時: 令和5年度7月13日(木) 16:00-17:00 木股 洋子 先生
- (iii) (微) 生物と温度の話
日時: 令和5年10月27日(金) 16:00-17:00 佐藤 悠 先生
- (iv) 病原性細菌のヘム輸送と代謝に関する研究
日時: 令和5年12月1日(金) 16:00-17:00 小崎 紳一 先生
- (v) 土着菌を生かす! ~アブラナ科作物根瘤病の軽減を物差しとして~
日時: 令和6年2月20日(火) 16:00-17:00 横山 和平 先生

＜ 8. 共同獣医学部の FD ＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2023 年 9 月 25 日（水）	開催場所	ZOOM を用いたオンライン形式
テーマ	2023 年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同 FD 研修会		
講師	下記の研修内容に記載	参加者	66 名（山口大学・鹿児島大学共同獣医学部教員）
研修内容 本学部では鹿児島大学との共同教育体制をとっており、両大学間の強固な連携は、質の高い獣医学教育のために重要である。よって、両大学での合同 FD 研修会を毎年開催している。本年度は下記の内容で開催された。 <u>基調講演</u> 演題：適切な成績評価について考える 講師：伊藤 奈賀子先生（鹿児島大学 学術研究院 総合科学域 総合教育学系 准教授鹿児島大学 総合教育機構 高等教育研究開発センター） 基調講演では、伊藤奈賀子先生より成績評価の概要、成績評価と学習評価の違い、文章生成 AI への対応を含めた現実的な提案を頂いた。また、成績評価は適切に行うだけでなく、学生に対してフィードバックをすることが重要であることについても再認識することができた。適切な成績評価を実施することは、JUAA（公益財団法人大学基準協会）による山口・鹿児島共同獣医学部の評価においても検討課題とされていた点であり、今回の基調講演により両大学の多くの教員がそれを理解し改善することへ繋がったと考えられた。 <u>教育ワークショップ</u> 1. 基礎系、2. 病態予防、3. 産業動物臨床、4. 伴侶動物臨床の 4 項目に分かれ、各項目における山口大学・鹿児島大学間での情報共有、今後の方針についての協議、各種の意見交換が行われた。 1. 基礎系 議題：①コロナ後の実習の状況について、②今後の基礎系講座について、③ポリクリと卒研の両立について、④実習の統合について 2. 病態予防 議題：①実習経費の減額に対する対応について、②学外施設における実習にかかる交通手段やその経費について、③病態予防におけるデータサイエンス教育について、④感染症関係の講義について 3. 産業動物臨床 議題：①講義、実習（実習場所、期間、内容等）について、②動物看護師、技能補佐員の診療補助および実習補助の体制について、③その他（動物の扱い方の学習方法について、代替実習について）			

4. 伴侶動物臨床

議題：①各大学で行う講義（双方向でない）の習熟度の到達度を共通化する必要性と方法について、②各大学の夜間診療の状況の確認、③VTの資格取得後の給与や仕事内容の変更に関して、④EAEVE認証前後での学生の臨床力に変化について

開催日時	2024 年 2 月 6 日（水）	開催場所	獣医学研究科棟 4 階 大講義室
テーマ	2023 年度 共同獣医学部 FD 研修会		
講師	該当なし	参加者	29 名 (山口大学共同獣医学部教員)
研修内容 全学で行われた学生を対象とした学修実態に関する各種調査結果（2022 年度在学生調査、2022 年度卒業時調査、2023 年度卒業生・修了生調査）より、共同獣医学部の結果を抽出し確認を行った。また、2023 年度前期および 2022 年度後期の共同獣医学部の学生の単位習得状況、および成績（GPA、成績散布図を含む）について確認を行った。それらを踏まえ、学生の学修状況における問題点抽出や、今後の教育改善に繋がる意見交換を行った。 <u>教育改善等について出された意見（抜粋）</u> ・成績不振にある学生に対しては、適宜面談を行い、成績不振に陥っている理由を考え、それを改善する方法を探っていくことが重要である。 ・共同獣医学部では既に行っているが、学生代表に学部内の各種委員会に適宜参加してもらい、講義・実習・運営等における学生の意見を聞く機会をもつことは重要と考える。 ・学生が習得について自信がないとの回答が多かった「外国語を使う能力」については、共同獣医学部には比較的多い外国人留学生と接する機会をより多く設ける（実習等で外国人留学生に TA として学生指導に加わってもらう、外国人留学生のいる研究室では学生と留学生の直接のやり取りを出来るだけ多く持ってもらう等）、また、海外の協定校等との交流（短期留学等）をより積極的に行う等により、外国語をより習得しやすい環境をつくることは重要と思われる。 ・共同獣医学部では現在、「大学の世界展開力強化事業」として「アフリカ諸国との大学間交流形成支援」のプログラムが動いている。このプログラムにおいては、山口大学とナイロビ大学（ケニア）の間で遠隔システムを用いた英語による講義受講や短期交換留学などが行われているが、これらに参加した学生の海外に向けて考える姿勢や英語を使用することに関する姿勢は非常に良くなっている。同等のプログラムが継続すると良いと思う。 ・学生が習得について自信がないとの回答が多かった「数理的思考とデータ分析・活用能力」については、最近、新たに開始されたデータサイエンス関連の講義や演習により、改善が期待される。 <u>学生調査に関する意見（抜粋）</u> ・アンケート結果を教員が確認する機会を持つことは重要だと思った。感覚的な意見ではなく、定量的な数値データを今後の方針に活かすべきだと思う。 ・回答率が低く（20~30%程度）、これを改善することはデータの質を上げるために必要である。そのためには、学生にとっての回答することに対するメリットを示す必要があると思われる。 ・「アンケート結果を受けて、このような取り組みを始めた」などの実例があれば、それを積極的に周知することで、アンケートの意義を皆がより感じられるようになると思う。			

(2) 教育改善

＜活動内容：授業公開（ピュアレビュー）＞

本学部では学部の教育力の向上を図るため、教員相互での授業参観を行っている。2023 年度に公開し参観が行われた授業は以下の通りである（対象学生：共同獣医学部学生、鹿児島大学との遠隔配信講義を含む）。

参観日	科目名	担当教員	発信大学	参観者
2023. 5. 1	獣医公衆衛生学	度会 雅久	山口大学	渡邊 健太
2023. 5. 16	データサイエンス技術Ⅱ	清水 隆	山口大学	大濱 剛
2023. 6. 8	獣医微生物学Ⅰ	早坂 大輔	山口大学	佐々木 直樹
2023. 6. 28	獣医薬理学D	宇野 泰広	鹿児島大学	佐藤 晃一
2023. 7. 5	獣医病理学D	森本 将弘	山口大学	櫻井 優
2023. 7. 19	免疫学Ⅱ	岩田 祐之	山口大学	日下部 健
2023. 7. 28	獣医公衆衛生学実習Ⅱ	安藤 匡子	鹿児島大学	清水 隆
2023. 11. 15	動物衛生学	岩田 祐之	山口大学	渋谷 周作
2023. 11. 20	手術学	谷 健二	山口大学	角川 博哉
2023. 12. 22	獣医キャリア形成論	非常勤講師	山口大学	佐藤 宏
2023. 12. 22	寄生虫学Ⅰ	佐藤 宏	山口大学	高木 光博
2023. 12. 26	獣医消化器病学B	非常勤講師	山口大学	板本 和仁
2024. 1. 9	獣医生理学	白石 光也	鹿児島大学	加納 聖
2024. 1. 23	獣医呼吸器・循環器病学	三浦 直樹	鹿児島大学	馬場 健司
2024. 1. 29	データサイエンス技術演習	清水 隆	山口大学	三宅 在子

授業参観を行った教員は、授業の内容や方法に対する感想、受講学生に対する感想、自身の授業に生かしたい点等について報告書を提出し、授業担当教員がその内容を把握できるようにした。また、その中で問題点などが指摘された場合は、授業担当教員がそれに対する対策書を提出する形をとった。

＜活動内容：獣医学セミナー＞

本学部では、教員間のピア・レビューとして本学部教員が持ち回りで講師を務める「獣医学セミナー」を開催している。各教員の研究内容を教員・学生に向けて紹介するセミナーを定期的に行うことで、学部の研究力・教育力の向上を図ることを目的としている。本年度は6回開催された。

第 89 回獣医学セミナー

演題：Codex 委員会 設立されて 60 年―食品の国際規格は命を救う

講師：豊福 肇 先生（獣医疫学）

日時：2023 年 6 月 21 日（水） 17:30-18:30

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：国連の FAO（国連食糧農業機関）及び WHO（世界保健機関）により設置された、国際食品規格の策定機関であるコーデックス委員会は、今年 60 周年を迎えます。国際的な食品安全を取り巻く状況は、気候変動をはじめとする環境問題、培養肉やゲノム編集食品等の新興技術を用いた新たな食品の開発や食料生産システムの変化、SDGs の重視等社会的価値観の変化や消費者嗜好の変化など、様々な変化の中にあります。本講演では、食品安全の確保における国際食品規格の重要性について改めて確認するとともに、今後のコーデックスのあり方と日本が取り組むべき課題について、紹介することを目的とします。

第 90 回獣医学セミナー

演題：牛群における飼料由来マイコトキシン汚染の概要と繁殖性への影響

講師：高木 光博 先生（獣医繁殖学）

日時：2023 年 7 月 26 日（水） 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：家畜に給与されている貯蔵飼料中には真菌が常在し、貯蔵環境の変化等により繁殖条件が整えば、増殖した真菌によって産生されたマイコトキシン（MT）が飼料を汚染することが知られている。近年、MT 汚染飼料の摂取が疑われる家畜の消化器疾患や繁殖障害等の中毒症状が世界的に報告されている。一方で「食品の安全性」に対する消費者意識の高揚や「動物福祉」などの観点等から、生産現場では環境衛生や飼養衛生を意識した取り組みが必須条件となっており、家畜飼養環境下における MT 浸潤動態のモニタリングは今後重要になるかもしれない。本セミナーでは、MT 汚染の背景について概説し、これまでに牛群において行ってきたゼアラレノン（エストロゲン類似作用を持つことから家畜に繁殖障害等を引き起こす可能性が示唆されている MT）に関する調査結果の一部を紹介させて頂く予定である。

第 91 回獣医学セミナー

演題：コウモリが保有する様々なウイルス

講師：下田 宙 先生（獣医微生物学教室）

日時：2023 年 8 月 30 日（水） 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：コウモリはパンデミックを起こした SARS-CoV-2 をはじめとして、ニパウイルスやエボラウイルスなど、人に重篤な病気を引き起こす数々の新興感染症の原因ウイルスのレゼルボアとして知られている。そのため、世界的にはコロナウイルスを中心として多くのコウモリ由来ウイルスに関する研究が進められている。国内でも SARS-CoV-2 に近縁なウイルスは見つかっており、調査の重要性は示されている一方で、国内に生息するコウモリ由来ウイルスの調査研究は極めて限定的である。そこで我々は国内のコウモリが新興感染症を運ぶリスクを評価するために山口県を中心として国内に生息するコウモリからウイルスの分離・検出を試みてきた。本セミナーではコウモリ由来ウイルス感染症の概要およびこれまでに我々が得た研究成果について紹介する。

第 92 回獣医学セミナー

演題：ゾウリムシモデルを用いた細菌研究の利点と課題

講師：渡邊 健太 先生（獣医公衆衛生学研究室）

日時：2023 年 10 月 25 日（水） 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：様々な環境中に広く存在する原生生物は、現在 65000 種以上が確認されている。そのうちマラリア原虫のように病原性を持つものはわずか数十種類であり、原生生物の大部分はヒトや動物での感染症とは無縁な存在として扱われて来た。身近な淡水環境中に生息する *Paramecium* spp.（ゾウリムシ）もまた、長く人畜無害な生物として認識されていたが、我々はこれまでにレジオネラ属菌やフランシセラ属菌がゾウリムシを自然宿主として利用し得ること、また、その病原性や感染性の獲得にも関与している可能性を示してきた。本セミナーでは、原生生物と病原細菌の多様な関係性や、ゾウリムシモデルを活用したこれまでの研究の中で明らかにできたこと、逆にまだ解明できていない研究課題などをまとめて紹介する。

第 93 回獣医学セミナー

演題：動物用血清アミロイド A（SAA）測定系による各種動物における病態診断への応用

講師：木村 透 先生（実験動物学研究室）

日時：2023 年 11 月 22 日（水） 14:30-15:30

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：感染症を始め急性炎症で顕著に変動する蛋白は、急性期反応蛋白あるいは急性相反応蛋白と総称される。イヌでは C 反応蛋白（CRP）、ネコ・ウマでは血清アミロイド A（SAA）蛋白が用いられているが、多くの動物種では適切な炎症指標が確立されていない。これまでに、私たちは動物用 SAA 測定系を開発し、実験動物、伴侶動物、家畜および動物園動物への診断応用を図り、急性炎症性病態で本測定系による SAA 値が適切な指標となることを明らかにした。今回の獣医学セミナーでは、これまでの動物用 SAA 測定系の研究成果について説明し、実際の疾患動物への適用事例を紹介する。本測定系が診断に果たせる範囲並びに残された課題を解説する。併せて、現在臨床検査医学分野で、広く活用されている CRP 測定系の新たな応用例を話したい。また、血漿アミノ酸分析が診断・治療法にもたらす可能性についても触れたい。

第 94 回獣医学セミナー

演題：獣医学におけるリキッドバイオプシーの現状

講師：上林 聡之 先生（獣医内科学）

日時：2024 年 1 月 10 日（水） 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：哺乳類の体液中には細胞から放出された核酸やエクソソームなどが微量に含まれており、近年の解析技術の向上により、これらの解析が可能となっている。人医学領域では腫瘍を始めとする様々な疾患においてこのような物質が病態を反映することが明らかになり、リキッドバイオプシー（体液を用いた生検）と呼ばれ臨床応用が始まっている。獣医学領域においても応用が模索されているものの、基礎的なデータが不足している現状である。我々は山口大学動物医療センターに来院した犬を対象に、血漿中の無細胞 DNA（cell-free DNA）について解析を行い、リンパ系腫瘍において濃度が増加し、予後と関連することを示した。本セミナーでは、獣医学領域におけるリキッドバイオプシーの現状および今後の展望について紹介する。

＜活動内容：獣医学特別セミナー＞

本学部では学部の研究力・教育力の向上を図るため、各分野の最先端の研究に教員・学生が触れる機会として、外部から講師を招聘して行う「獣医学特別セミナー」を定期的に開催している。本年度は5回開催された。

第 58 回獣医学特別セミナー

演題：スーツ型レベル 4 施設におけるバイオセーフティ

講師：黒崎 陽平 先生（長崎大学高度感染症研究センターバイオリスク管理部門）

日時：2023 年 6 月 29 日（木）16:00-17:30

場所：獣医学研究科棟 4 階 大講義室

※当セミナーは講演内容の特殊性から、聴講を日本国籍保有者に限定して行われた。

第 59 回獣医学特別セミナー

演題：細菌感染による宿主環境のリプログラミングと疾患発症

講師：近藤 豊 先生（名古屋大学医学研究科 腫瘍生物学分野）

日時：2023 年 9 月 29 日（金）16:00-17:30

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：近年、共生細菌と宿主環境との相互作用を原因とする疾患発症とその分子メカニズムが注目されている。これらの関係を理解することは、いくつかの難治性疾患に対する新しい治療アプローチにつながる可能性がある。我々は子宮内膜症という疾患が、子宮内膜への *Fusobacterium* 感染、および感染による線維芽細胞から病原性の筋線維芽細胞への転換を原因とすることを明らかにした。本セミナーでは細菌感染による宿主環境のリプログラミングおよびその疾患治療への応用について述べたい。

(*Sci Transl Med.* 15, eadd1531, 2023)

第 60 回獣医学特別セミナー

演題：新型コロナウイルス感染症と細胞老化

講師：辻 竣也 先生（山口大学 医学系研究科 薬理学講座）

日時：2024 年 1 月 19 日（金）16:00-17:00

場所：獣医学研究科棟 4 階 大講義室

要旨：新型コロナウイルス感染症患者は、Long COVID と呼ばれる後遺症に苦しんでいる方も多くいることが知られており、ウイルスが体内から排除された後も続く慢性的な炎症反応がその発症に関与していることが示唆されているが、詳細な発症機序は明らかになっていない。細胞老化は、発がんの危険性のあるストレスを受けた細胞が、不可逆的に細胞周期を停止する現象だが、senescence associated secretory phenotypes (SASP) と呼ばれ、炎症性物質を分泌し続けるようになることが近年明らかになってきている。我々は、新型コロナウイルス感染により細胞老化が引き起こされ、生体内で長期的に続く炎症反応、Long COVID の発症、持続に関与していることを明らかにした。

(Tsuji S et al. *Nature Aging* 2022,2(2):115-124)

第 61 回獣医学特別セミナー

演題：中央競馬における獣医師の役割について

講師：金井 功太 先生（日本中央競馬会馬事部獣医課診療係長）

日時：2024 年 1 月 26 日（金）10:30-11:30

場所：iCOVER2 階 201 室

要旨：日本中央競馬会（JRA）における診療業務について、また馬医療の実際と今後の展望について概説します。その他、JRA の業務内容や施設について紹介します。

第 62 回獣医学特別セミナー

演題：獣医師になる前に知っておきたい腹部エコー疾患

講師：栗原 学 先生（一般社団法人 LIVES 理事、株式会社 AIS 代表）

日時：2024 年 2 月 10 日（土）10:00-12:00

場所：iCOVER1 階 101 室

要旨：腹部エコーの基礎的な内容から絶対に見逃してはいけない疾患、発展的な診断法についてご講演いただきます。栗原先生は、昨年、米国獣医画像診断専門医を取得されており、特にエコーの巨匠のもとでレジデントを行い、専門医試験に合格されております。

＜活動内容：総合臨床セミナー＞

本学部では、学部の獣医臨床における研究力・教育力の向上を図るため、「総合臨床セミナー」として年に1-2回、臨床系教員もしくは外部講師による、教員・学生・学外獣医師を対象としたセミナーを実施している。本年度は2名の外部講師を招いて1回実施された。

第20回総合臨床セミナー

日時：2023年12月17日（日）12:30-17:00

場所：獣医学研究科棟4階 大講義室

講師：小林 哲也 先生（日本小動物がんセンター、米国獣医内科学専門医）

賀川 由美子 先生（病理検査会社ノースラボ、米国獣医病理学専門医）

演題：第一部：細胞が採れなきゃはじまらない！知って得する生検法のコツとツボ

第二部：アメリカへの留学をあまりおすすめしない3つの理由

<活動内容：学生授業評価>

2023年度の学生授業評価アンケートの結果は以下の通りである。

学生授業評価アンケート（講義） 回答数 453

【講義】出席率	回答数	90%以上 (14回以上)	80%以上～90%未満 (12～13回)	60%以上～80%未満 (9～11回)	40%以上～60%未満 (6～8回)	40%未満 (6回未満)
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	453	415 (91.6%)	33 (7.3%)	5 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
【講義】授業時間外学習	回答数	3～4時間程度 又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	453	97 (21.4%)	136 (30.0%)	107 (23.6%)	56 (12.4%)	57 (12.6%)
【講義】理解度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	453	215 (47.5%)	209 (46.1%)	20 (4.4%)	8 (1.8%)	1 (0.2%)
【講義】目標到達率	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？	453	192 (42.4%)	197 (43.5%)	61 (13.5%)	2 (0.4%)	1 (0.2%)
【講義】満足度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業について満足しましたか？	453	292 (64.5%)	123 (27.2%)	21 (4.6%)	15 (3.3%)	2 (0.4%)

学生授業評価アンケート（実習） 回答数 146

【講義】出席率	回答数	90%以上 (14回以上)	80%以上～90%未満 (12～13回)	60%以上～80%未満 (9～11回)	40%以上～60%未満 (6～8回)	40%未満 (6回未満)
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	146	143 (97.9%)	3 (2.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
【講義】授業時間外学習	回答数	3～4時間程度 又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	146	12 (8.2%)	29 (19.9%)	48 (32.9%)	23 (15.8%)	34 (23.3%)
【講義】理解度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	146	80 (54.8%)	56 (38.4%)	8 (5.5%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)
【講義】目標到達率	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？	146	66 (45.2%)	57 (39.0%)	21 (14.4%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)
【講義】満足度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業について満足しましたか？	146	114 (78.1%)	25 (17.1%)	5 (3.4%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)

- ・出席率：講義、実習共にほとんどの学生が9割以上出席している状況が確認された。
- ・授業時間外学習：授業1回あたりの授業時間外学習時間が1時間程度以上の学生が多く（講義：75%、実習：61%）、高い学習意欲が伺われた。学部図書室やクリニカル・スキルスラボ等の自主学習環境を整備したことも、学習時間の増加に繋がっていると考えられる。
- ・理解度、目標到達率、満足度：肯定的意見（そう思う・ややそう思う）が、理解度と満足度に関しては9割以上であったが、目標到達率に関してはより低い値となった。シラバスに記載された到達目標を達成するための、更なる授業内容・方法の改善が求められる。

＜ 9. 国際総合科学部の FD ＞

（ 1 ） 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	4 月 26 日 13 : 30～15 : 30	開催場所	経済学部多目的棟 2 階演習室 3
テーマ	学部長懇談会のあり方について、経済学部から提供されたスペースの利用について		
講師	杉井学	参加者	15 名程度
研修内容 新しく学部長となった杉井先生の発案で毎月第 4 水曜日に学部長懇談会と題して、教員（時には職員や学生も）が集まって学部の抱える様々な課題を考えたり、将来像を描いたりする機会を持つこととなった。教育に関するテーマの場合は実質的には FD であるのでここで取り上げる。第 1 回目が 4 月 26 日に開催され、学部長懇談会のあり方について教員で意見交換がなされた。懇談会のテーマによっても異なるが、教員が教育、研究、管理・運営について抱える課題や学部の将来像についてできるだけざくばらんに語り合う機会を持つことが望ましいだろうということとなった。 また、第 1 回の開催場所を経済学部多目的棟 2 階演習室 3 としたのは、4 月に経済学部から国際総合科学部へのスペースの提供があり、それをどのように教育・研究に活用していくかということについて意見交換することも目的であった。教育に関しては PBL のチームに割り当てる演習室として利用することについて議論された。国際総合科学部では教員に紐づいた演習室を確保できておらず、共有スペースとして教員もしくは学生が演習室を予約して利用しており、学生がいつでも自由に使えるスペースが不足していた。そのことが PBL 活動にも影響を与えているのではないかと危惧されていた。そのため、一部のチームではあるが試行としてチームが自由に使えるスペースを提供し、彼らがそのスペースをどのように利用するかを確認しようということとなった。その結果に基づき、令和 6 年度からのスペースの利用法を考えていくことになった。			

開催日時	5 月 24 日 13 : 30～15 : 30	開催場所	総合図書館 1F アカデミックフォレスト
テーマ	ChatGPT について		
講師	村井礼	参加者	15 名程度
研修内容 ChatGPT に代表される生成系 AI が社会に広まっていく中で、便利な面がある一方で、様々な課題があることも明らかになってきている。そこで、ChatGPT をこれまで様々な形で使ってきた村井先生から ChatGPT でどのようなことができるのか、どのように利用するのか、どう工夫すればうまく利用できるのかといったことを、実際に利用してもらいながら説明していただいた。その後、生成系 AI をどのように利用し、教育に役立てるか、何に注意すべきなのかを議論した。 その議論の中では、課題として学生によるレポート作成への ChatGPT の利用があげられた。ChatGPT が作成した文章をそのままレポートとして提出することは当然問題であり、そのようなレポートは認められないが、学生の ChatGPT の使用を禁止することは現実的に不可能であるし、また、適切な利用法を学ぶことが今後社会において活躍するために必要なことであるということとなった。			

開催日時	7月28日 13:30～15:30	開催場所	事務局1号館
テーマ	学生と教員の意見交換		
講師	杉井学	参加者	10名程度
研修内容 国際総合科学部の将来構想についての学生からの意見を吸い上げるとともに、学部創設10周年のイベントについての意見や、教育などにおけるさまざまな意見・不満などを集めるために、学生を交えた学部長懇談会を開催した。5名程度の学生の参加があり、様々な意見をうかがうことができた。 教育に関しては、以前から学務係を通して聞いていた不満だったが、新カリキュラムにおいて2年前期の授業が1年次に比べてかなり少なく暇であるとか、これで卒業に必要な単位をとることができるのかといった不安を直接聞くことができた。これは新カリキュラムの実施にあたり、学年、学期ごとの授業の配当に不適切な面があり、学生に謝罪するとともに、次年度から開講時期を変更する予定であり令和6年度入学生からは改善されること、卒業については順調に単位がとれていれば特に問題はないことを説明した。これらの学生の意見をもとに、教学委員会での意見交換の後に、各教員へ授業の開講時期を変更できるのかを問い合わせを行い、可能なものを2年次前期に移動することで、開講時期の偏りを解消することができた。			

開催日時	12月13日 14:30～16:00	開催場所	国際総合科学部大会議室
テーマ	「山口と世界」の現状と再編案		
講師	杉井学	参加者	14名
研修内容 「山口と世界」の担当者（国際総合科学部教員と機構の教員）が集まって、「山口と世界」の現状を確認するとともに、今後どのように改革していくかを話し合った。 まず、資料に従って、杉井先生の説明のもと、現状として「山口と世界」に課されている条件を確認した（授業の名称、グループワークを伴うアクティブラーニング、所属学部を混在させたクラス設定、STEAM教育の実践）。さらに、課題についても紹介がなされた。あげられたものとしては、教育目標が明確ではない、1クラスのサイズが大きくグループワークを伴ったアクティブラーニングを行うのが難しい、担当教員の専門性と山口と世界の内容との不一致、STEAM教育については文系学部と理系学部と一緒にグループワークをするというレベルにとどまっている、といったものがあつた。 その後、各教員の授業のやり方や評価の方法の紹介があり、教員ごとの授業方法や評価方法にかなりの差があることが教員間で共有された。また、他の教員のやり方を知ることで、自身の授業の改善の参考になることが期待される。			

開催日時	12月27日 13:30～15:30	開催場所	国際総合科学部大会議室
テーマ	PBLに関する意見交換会		
講師	杉井学	参加者	9名
研修内容 プロジェクト型課題解決研究（PBL）は国際総合科学部の卒業研究にあたる授業であるが、パートナーと連携し学外に出ていくことや、グループワークを中心に行うなど通常の卒業研究とはかなりやり方が異なっており、新任の教員にとってはどのように進めたらよいのか不安なこともかなりある。このFDでは特に新任の教員から疑問点や不安な点などを出してもらい、これまでPBLをやってきた教員との対話の中からそれらを解決して、PBLの指導を適切に行ってもらえるようになることを目的としている。 実務的な面では、パートナーからいただいた寄付金の使用方法が難しく、何に使えて何に使えないのか、学生の旅費として使うにはどのような手続きが必要となるのか、大学の経理か機関経理かによってどのように使い方が異なるかなどの説明がなされた。 また、国際総合科学部ではPBLのレベルを上げるにはどうしたらよいのかということが、長年の課題となっている。教員の研究分野とPBLでの課題解決・価値創造が全く関係ない場合もあり、その場合の教員のかかわり方や指導の難しさなども話題となった。			

開催日時	2月28日 13:30～15:10	開催場所	国際総合科学部大会議室
テーマ	教育改善FD研修会、及び各種調査結果（在学生アンケート、卒業時アンケート、卒業生アンケート）をふまえた、学生の学修成果の修得状況の確認及び教育改善等について意見交換するFD研修会		
講師	北西功一	参加者	14名
研修内容 FDコーディネーターの北西から、学生アンケートおよび卒業時アンケートについて国際総合科学部に関する部分を分析した資料に基づいて説明した後、意見交換を行った。 国際総合科学部の在学生・卒業生に関するデータの分析結果からは、身に付けた能力については他学部と比べてある程度評価が高いものの、満足度については評価が低いことが明らかになった。この点については、国際装具科学部のカリキュラムの中で学生はある程度の能力は身に付けているものの、学生が入学前に期待していた学修内容と異なっているのではないかという意見があった。 国際総合科学部で評価が低い部分として、在学生では「専門科目で学んだ知識・技能」、卒業時では「現在の専門を学んだことを誇りに思っているか」というものがあるが、これについては国際総合科学部にとっての「専門（分野）」とは何なのか、という学部ができた当初から言われ続けている課題が関わっている。特定の学問分野を専門としていない学部の専門性は学部生、受験生をはじめとする外部の人たちに理解しにくいものになっており、学部の教員の間でもこれまで議論されている。「課題解決能力」を育てる学部であるというのがその回答になるべきであるが、質問の形が学問の専門分野を連想させてしまうものであるとその評価が低くなるのも仕方がないのではという意見もあった。 学生自身が身に付けた能力として挙げているもので国際総合科学部が他の学部と比べて評価の高いものはPBLにかかわる能力が多い。その点からPBLの学修がある程度機能していると考えられるが、教員からは、あくまでもこれは学生自身の評価であって、けっしてPBLが高いレベルのものになっているわけではないことを留意すべきであるという意見があった。教員ごとにPBLでの指導方法がかなり異なることなども意見としてあり、無理に統一する必要はないものの他の教員のPBLがどのように運営されているのかを知るためにピア・レビューが必要であるといった意見があった。 卒業時調査の身に付けた能力の中で、数理的思考力とデータ分析・活用能力の評価が他学部と比べて低かった。これについては1,2年生の授業でかなり時間を割いて行っているものの身に付いていない、もしくは実際にPBLでデータを収集して分析をしようとしたときに自分でできないということになっている。1,2年生で学んでいることが今後どのような場面で活かすことができるのかを学生が実感できないまま、その時限りの知識・技能になっており、授業が終われば忘れてしまうというのが多くの学生の現状である。学生が科目間のつながり、さらに卒業後にもそれが活かせることを理解したうえで、受講することで、より実践的なものになるはずである。教員も授業で学ぶ知識・技能が実際にどのように生かすことができるのかを常に学生に説明しながら授業を行うべきであるといった意見があった。			

（２）教育改善

＜活動内容：PBLにおける副担当教員としてのピアレビュー＞

12月27日に行われたプロジェクト型課題解決研究（PBL）に関する意見交換会において、PBLにおけるピアレビューの必要性が議論された。PBLは新しい授業の形態を持つものであり、教員自身が学生時代にPBLを通じた教育を受けてきたわけではなく、教員はそれまで経験のない授業を構築するためにそれぞれが努力をしてきた。ただし、その授業そのもののやり方、成績評価方法、副担当教員がどのくらい授業や評価にかかわるのか、パートナーとの関係のあり方などについては、教員ごと（場合によっては同じ教員でも年度ごとに）にかなりの差が生じてきている。また、新任の教員が初めてPBLを担当するときにはどのように授業を進めてよいかわからないことも想定される。

このような状況の中、授業における教育効果を高めるためにピアレビューが有効ではないかと議論がなされている。現状では、新採用の教員がいきなりPBLの主担当教員とはせずに、副担当教員として主担当教員をサポートする形でPBLに参加し、そこでPBLについての経験を積み、翌年度から主担当教員となる形をとっている。広く授業を公開するという形ではないためピアレビューとは言えないかもしれないが、経験の浅い教員が経験の積んだ教員とともにPBLの授業を担当することで同僚から授業のやり方を学ぶという点でここで掲載をした。

<活動内容：主指導教員の2年次での選択制の導入>

令和4年度から新カリキュラムが始まったが、その改革の一つとしてグローバルイヤー期間中及びその前後の学習指導のやり方の変更があった。グローバルイヤーというのは2年次後期から3年次前期の期間を指し、この期間は国際総合科学部の学生は留学や日本国内での学習によってグローバルな視点を養うこととし、留学に行かない学生向けに通常の授業も開講はされるものの多くはなく、学生自身で学修計画を立てて、それぞれの学生が学びたいことを学べる期間としている。

旧カリキュラムでは2年前期の地域理解・連携演習Ⅰでグローバルイヤー期間中の研究計画を作成し、3年第3Qの地域理解・連携演習Ⅱでグローバルイヤー期間中の研究をまとめるという形をとっていたが、地域理解・連携演習Ⅰ・Ⅱともに100名の学生を2名の教員で担当することになっており、学生個人ごとに興味・関心が異なる中、学生のニーズに対応したきめ細やかな指導が難しかった。そのため、新カリキュラムでは授業名を「グローバルイヤー準備」と「グローバルイヤーまとめ」というように変え、6名程度の小グループに分けて多くの教員で担当することとした。さらに、その担当を学生が2年次の初めに選択をするようにした。それによって、学生の興味・関心に従って指導を受けることを可能にするとともに、きめ細やかな指導を行うことができた。

課題としては、教員による指導方法・評価方法に違いがあり、学生に不平等が生じているのではないかと、単位を落とした学生の再履修をどうするか、一部の教員に希望が偏るためすべての学生が希望する配属先に行けないといったことがある。1つ目については教員間で情報交換をしていくことで解消をしていきたい。2つ目については教学委員会や拡大教授会で議論がなされているが、3年第3Qの「グローバルイヤーまとめ」のケースとともに考える必要があり、この授業の単位を落とすのはレアケースであると思われるが、そうだからこその何らかの事情があるはずで、当該学生との面談の上、個別な対応が必要となるかもしれない。3つ目については仕組み上解決が難しく、今後の課題である。

「グローバルイヤーまとめ」は令和6年度第3Qに初めて開講される。グローバルイヤーでの研究やさまざまな体験についてまとめることへのきめ細やかな指導ができることが期待される。

＜ 10. 人文科学研究科の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 6 年 2 月 20 日（火）	開催場所	人文学部大講義室
テーマ	大学院生指導を考える		
講師	修士過程の指導を終えた教員	参加者	教員 11 名
研修内容 大学院の修士論文発表会に引き続き、人文科学研究科の FD 研修会を実施した。具体的には、修士課程の指導を終えた教員から、指導にあたっての工夫・苦労等を簡単にご紹介いただき、研究科教員の間で改善点や問題意識を共有することを目指した。 特に、留学生の指導についての難しさを指摘する声が多く、日本語能力試験で N1 レベルの留学生であっても大学院生として十分な日本語を使えるわけではないこと、話し言葉の熟練度と書き言葉の習熟度が異なるので注意が必要なことなどが指摘された。そのため、修士論文作成まで、かなり時間がかかることもあったという事例が報告された。 また、大学院では少人数の密度の濃い教育が行われている反面、大学院生同士のつきあいが学部に比べて少なく、孤独になってしまう可能性があるという問題提起がなされた。 他方で、母国（この場合には中国）では学べない研究ができることの意義ややり甲斐などもある、という報告もあった。 就職面についての苦労等、大学院における研究のみならず、就職指導の面でも指導教員を含めたサポートが必要であるとの指摘があった。			

（２）教育改善

（１）学生アンケート

所属学生数が少ないことから人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。令和５年度もこれを踏襲し、５人の大学院生から回答を受け取った。

内容として、人文科学研究科の改組時に新しいカリキュラムとして設置した「人文科学総論」という分野横断の教養授業について課題の分量の統一を求める意見や開講分野の多様性を求める意見などが見られた。

また、設備面での要望が多数寄せられた。

（２）教員授業評価

令和４年度においては「学生は、授業の内容をよく理解できたと思いますか？」については「ややそう思う」以上が前期、後期ともに 90%弱であったのに対して、令和５年度においては後期は同様であるものの、前期のみ 50%と低下している。

「学生は、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？」の項目については、令和４年度においてはいずれも「そう思う」「ややそう思う」が 90%弱であったが、令和５年度においても同様である。

ただし、人文科学研究科は在籍大学院生数が少ない少人数研究科であり、講義に携わる教員数は毎年変動することもあり、数値から年度を超えた一般的理解を得ることは難しいと思われる。

＜ 1 1 . 教育学研究科の FD ＞

（ 1 ）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2023年9月7日（木）	開催場所	教育学部43番教室
テーマ	令和5年度自己評価書から、学校経営コース担当教員として組織・個人の成長・発達を検討する		
講師	なし	参加者	5名
研修内容 学校経営コースFD研修会として、研修会を実施した。 1 目的 認証評価受審年である本年度、「自己評価書」（令和5年度）、「学校・教育委員会関係者対象調査」（令和4年度調査結果の概要）を基礎資料として教員間で検討しあうことにより、学校経営コース担当教員には、どのような課題があるのかを省察し、以後のコース運営についての改善策を検討する。これにより、授業者、指導者としてのレベルアップをはかる。 2 内容 上記基礎資料を予め読んだ上で、コースとしての授業や院生指導における課題を出し合った。また、コースの大学院生にも参加を呼びかけ、院生の立場からみた、授業者、指導者としての教員、改善要望等の意見を出してもらった。その結果、コース担当教員は昨年度から減員となったが、指導の質はどれも満足のいく水準が維持していることが院生からも確認された。特に、中間発表会、成果報告会については、コロナ禍以後、オンライン実施、原籍校／教育委員会等における実施が定型となったが、関係者の参画意識はむしろ高まり「共同研究」として実施するというメッセージを強く出せている、院生の研究環境も改善されたといった意見が出た。ほかに、コース研究会を院生の参画を促して充実させたこと、コース内を2チームに分けたチーム別指導体制を創設したことについても、コース教員、院生の双方から評価された。 3 今後の課題、FDの利活用等 実践研究論文の執筆に関する指導、中間発表会・成果報告会の運営方法等については、今後、大学教員による指導力等の向上により質的改善が期待される。FD以後、各教員は情報交換を重ねながら、また院生の意見にも耳を傾けながら、次年度に向けた体制整備を進めている。			

開催日時	2023年9月25日(月)・11月14日(火)	開催場所	教育学部43番教室・第3会議室
テーマ	学校実習で学んでほしいこと・新規採用教員として身につけてほしいこと		
講師	柳井崇史・岡本昭彦(山口大学教育学研究科特命教授)	参加者	9名・11名
研修内容 教育実践開発コースFD研修会として、2回に分けて、研修会を実施した。 1 研修からの学び(研修のふり振り返りより) (1) 今後の院生への指導に活かしたいこと ・講話の中にあつた教員の業務のうち、「スキマを埋める」ことのできる人材を育てたい。そういう人が成長でき、専門性を高め、子どもの可能性を伸ばせる先生になる。 ・教師の成長曲線をもとに自分のなりたい教師像や目標を描くことができることが大切。 ・現場でモデルになる教員を見つけて、指導技術や熱意を吸収することが大切。 ・指導技術の具体を共有し合う、盗む、身につけることを意識させる。 ・実地授業など早めの計画、案内は教員になってからも必要な力。 ・人から信頼される教員になるために必要な指導を共有したい。 ・教員として様々なことに関心を示し、主体的・意欲的に取り組むよう指導したい。 ・先輩や同僚と対面でコミュニケーションがとれる人材を育てたい。 ・電話の応対ができるように指導したい。 (2) その他 ・大変わかりやすい内容で、院生にも話を聞かせたことがよかった。 ・メール等の連絡や返信を徹底することが重要(学部生にも徹底したい)。 ・県内の若手教員が何に悩んでいるかが分かった。 (3) 今後取り上げてほしい内容 ・実習で生徒指導にどう関わっていくかを知りたい。 ・研究のまとめ(年度末に提出するバインダー)を全指導教員で確認し合いたい。 ・いかに優秀な学生を確保するか協議したい。 2 事後の利活用 ・日々の院生への指導の共通理解を図ることの重要性を感じている。本年度の講話を聞く中で共感できることや異なる視点を共有することで、院生の課題を明確にし、把握することもできた。次は実際に指導にいかすことである。学校現場で望まれる教員を大学院でどのように育てていくかを引き続き多くの指導教員と行っていく。そのための機会の確保、情報共有の在り方を今後も充実させたい。 ・本年度認証評価が行われた。必要な取組の「実質化」を「本質化」にしていくことが重要である。取組を行う(実質化)ことで目標にたどり着く(本質化)。そのためのFDを今後も行っていく必要がある。			

開催日時	2024年1月26日（金）	開催場所	教育学部附属特別支援学校
テーマ	自立活動の基本理解と実態に応じた指導目標の設定の考え方について		
講師	柳澤亜希子（山口大学教育学部准教授）	参加者	5名
研修内容 特別教育支援コースFD研修会として、附属特別支援学校の研究発表会での講演の機会を利用し、研修会を実施した。 1 目的 コアカリキュラム（特別支援教育分野）作成において極めて深い関係性のある「自立活動」について、実態把握、指導目標の設定のプロセスについて知り、今後のカリキュラムマネジメントにいかす。 2 内容 講演および演習等に参加し、「自立活動」について共通理解を図り、今後のカリキュラムマネジメントへのいかし方について協議した。 【議論】 ・自立活動とは？ ・自立活動の指導目標とは？ ・自立活動の指導内容の要素とは？ ・自立活動の評価とは？ ・実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れは？ ・指導すべき課題の選定の在り方とは？ ・その他 ・演習を含む 【事後の利活用・来年度のFD研修に向けて】 自立活動の指導目標、指導内容、評価、留意点について改めて知ることが可能となった。これらのことに留意しながら、今後の特別支援教育コースにおけるカリキュラムマネジメントに生かしていきたい。			

(2) 教育改善

<活動内容：学生授業評価・教員授業自己評価>

1. 概要

令和 5（2023）年度の教育学研究科の授業についても、学生授業評価・教員授業自己評価を実施した。

2. 結果

図 1 は過去 8 年間の専門職学位課程の学生授業評価・教員授業評価の実施率である。学生授業評価実施率はわずかに減少しているが、教員の授業評価実施率は、令和 4(2022)年度から大きく上昇し、改善が見られた。

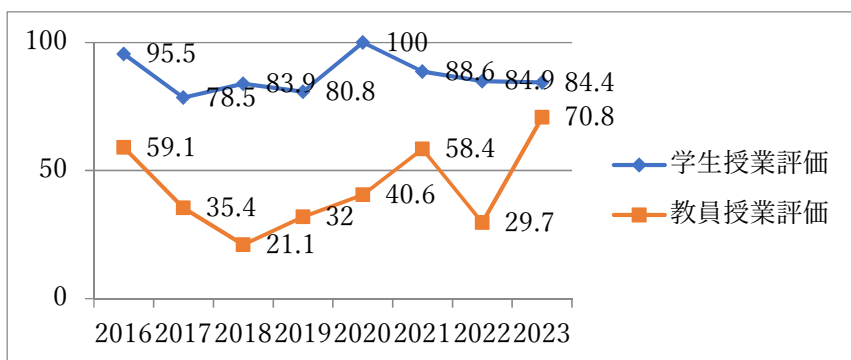


図 1 授業評価実施率の経年変化

図 2 は令和 3（2021）年度から令和 5（2023）年度の学生の授業時間外の学習時間を示したものである。令和 5（2023）年度は、令和 4（2022）年度と比較して、3 時間を超えて学習時間を確保した学生は減少したものの、2 時間程度および 1 時間程度の学習時間を確保した学生が増加している。

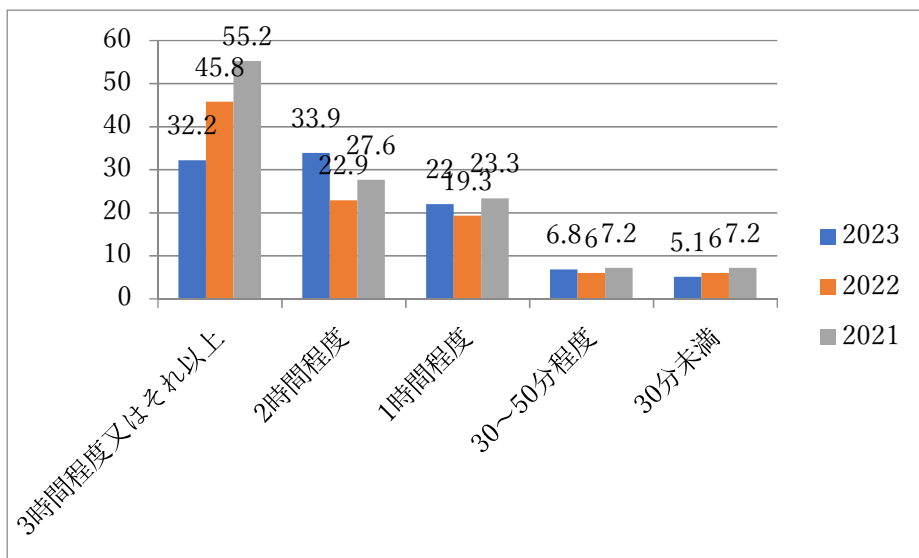


図 2 授業外学習時間

3. 課題

令和 5(2023)年度は、教員授業評価の実施率が上昇したが、引き続き授業評価の意義を説明し、授業評価の実施率をさらに向上させる取り組みが必要とされる。

< 1 2. 経済学研究科のFD >

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

経済学研究科では、FD研修を経済学部と共に行うので、< 3. 経済学部のFD >の項で述べたFD研修会が本研究科のFD研修会であるという位置づけである。

(2) 教育改善

< 活動内容：教員の教育技法の改善 >

1. 趣旨

本学におけるFDの定義として、絹川正吉＝館昭編著『学士課程教育の改革』（東信堂、平成16年）がFD活動の例として示すその第3に「教員の教育技法（学修理論、授業法、討論法、学業評価法、教育機器利用法、メディア・リテラシーの習熟）を改善するための支援プログラム」を掲げている。

他方、経済学研究科の公共管理コースでは、全ての講義を英語で実施している。

そこで、英語で授業を行う教員を中心に教育技法としての英語能力を高め、留学生向けの英語授業や留学生とのディスカッションをより円滑にするために本研修を例年行っている。

2. 概要

①実施日時：第1回・第2回 2023年9月25日10時～12時、13時～15時
第3回 2024年3月21日9時～12時
第4回・第5回 2024年3月25日10時～12時、13時～14時

②実施場所：オンライン

③研修テーマ：教員の英語能力向上を図る－writingを中心に－

④講師：尊田 望 本学共通教育非常勤講師

⑤参加者：4名

⑥研修内容：

教員が作成した講義用のパワポ、資料等の添削がある。英語でパワポを作成する場合の注意点、改善点に分かり、講義資料の作成や修士論文の指導に役立ち大層有意義である。

この他、本研究科では、教育改善についても経済学部と共に行うので、< 3. 経済学部のFD >の項で述べた経済学部における教育改善が本研究科の教育改善であるという位置づけである。

＜ 1 3 . 医学系研究科の FD ＞

平成 21 年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科の FD 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、学部の FD 活動に参加する形で FD 活動を行った。具体的活動内容に関しては、5 . 医学部の FD を参照されたい。

＜ 1 4 . 創成科学研究科の FD ＞

理学系

（ 1 ）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2024 年 2 月 14 日（水）	開催場所	理学部 1 号館第 2 2 番講義室
テーマ	障害等のある学生への「合理的配慮」-対応例から見る調整のポイント-		
講師	岡田菜穂子（学生支援センター・准教授）	参加者	50 名
研修内容 障害をもつ多様な学生に対する授業や評価に関する「合理的な配慮」と、このような学生たちに対応する上での教員側の心構え、などについて具体例を踏まえて講演をしていただいた。 日常的に多様な学生への対応で理学部構成員全員が試行錯誤していることもあり、多くの参加があった。質疑応答の時間には、障害学生への具体的対応方法や考慮すべき範囲を踏まえた学生指導の方法などについて、多くの質問があり、それぞれの質問について講師から丁寧な説明をいただいた。理学部教員にとって非常に有意義な機会となった。			

開催日時	2024 年 3 月 13 日（水）	開催場所	理学部 1 号館第 2 2 番講義室
テーマ	就職活動・インターンシップの新しいカタチ		
講師	平尾元彦（学生支援センター・教授）	参加者	31 名
研修内容 近年、多様化する就職活動の実態について各種事例および学生支援センターのサポート体制について紹介いただいた。各企業が準備する長期間・短期間のインターンシップの例や、就職活動を進める学生に対する対応の仕方など、学生指導に関わる教員にとって具体的な説明をしていただいた。 多様化している就職活動の形態について、多くの教員が日常的に学生への指導や、授業欠席時の配慮などをどのようにすべきか試行錯誤している。そのため、質疑応答の時間には、就職活動のスケジュールと授業が重なる場合に学生が相談があった場合、どのように指導すべきか等、具体的な質問が多くあり、それぞれについて講師から丁寧な説明をいただいた。理学部教員にとって非常に有意義な機会となった。			

(2) 教育改善

<活動内容：授業公開（ピアレビュー）（物理・情報科学科 物理学分野）>

(1) 授業名「スポーツ物理学特論」

1) 概要

- ① 実施日時：令和6年1月5日（金） 12:50 - 14:20、令和6年1月19日（金） 12:50 - 14:20
- ② 対象学生：大学院創成科学研究科博士前期課程基盤科学系専攻
- ③ 授業概要：スポーツ動作のメカニズムについて物理学的に考察し、スポーツ動作のメカニズムについて物理学的に議論できるようになることを目指す。
- ④ 授業担当教員：坂井 伸之
- ⑤ レビュアー：栗原、藤原、齊藤、野崎

2) レビュー結果

① 概要：

(ア) 受講生のみならず参加していた他の大学院生が積極的に質問するなど、よい雰囲気を作れていた。

(イ) 一方で、一度も発言をしない学生もいたので、強制的に発言を促す仕掛けをしてもよいかと考える。（まだまだ発言しようとする風潮が弱い。）

※1/19の授業で質問を成績に反映させる旨が担当教員から伝えられた。

② 優れている点：

(ア) 発表のスライドはきれいに作成されており、動画、図表、写真等が効果的に使われていた。発表内容も授業の趣旨にしっかり合わせてあった。そのため、内容に関するよりくわしい議論が可能となった。

(イ) 質問時間も適正な長さとなっていた。

(ウ) 座学の内容を用いて思考する課題を与え、学生自身に思考させ、発表させることはとてもよい取り組みである。座学で得た知識を自分のよく知る動作にあてはめて考えることで、その知識をうまく定着させることができている。

(エ) 学生に対して質問を募る際に、学生を履修者、それ以外の大学院生、ピアレビュー参加者のようにグループに分け、グループごとに質問を促していたのはとてもよいと思った。

③ 気付き：

(ア) ピアレビューでなくても課題発表等には他の教育を招待するのもよい試みかと思う。

(イ) 物理学の基本的な考え方を、学生自らの体験の中に適用させることは、力学そのものの理解に対してとても効果的であると考ええる。古典力学以外でもそのような試みをする時間があればよいのだが。

④ その他：以下の通り、学生の発表に関するコメントもあった

(ア) 内容が難しすぎる発表があった。

(イ) 投てきや打撃の場合、リリースのタイミングと角度の関係、インパクトのタイミングと角度の関係も「速い球や槍をなげる」、「遠くまで投げる」、「鋭い打球を打つ」ことそれぞれに密接に関係していると思われるが、学生がそこにはほとんど注目していなかったことは気になった。

(ウ) 投てきや打撃を扱う発表者が多かったのは何らかの理由があるのだろうか。

(エ) 厳密には各動作間の複合要素が絡むケースが多いのだろうが、それぞれの学生が、まずは一連の動作の中で何かに絞って思考することから始めてみることはとても重要だと感じた。

農学系

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 5 年 7 月 19 日 13:30-14:00	開催場所	農学部大会議室
テーマ	理工系学生の就職事情 ～就職活動の概況～		
講師	佐川 直哉 氏 (株式会社ディスコ)	参加者	31 名
研修内容 創成科学研究科 (農学系) では、農学部 FD 研修会と一緒に、各種 FD 研修会を開催した。株式会社ディスコの佐川直哉氏を講師に、「理工系学生の就職事情 ～就職活動の概況～」をテーマに農学部アラカルト型 FD 研修会を実施した。主な内容は以下のとおり。 1. 2024 卒就職活動状況 一般に、広報活動開始が 3 月 1 日、採用選考活動開始が 6 月 1 日、正式な内定日が 10 月 1 日である一方で、3 月以前に、50%を超える企業が広報活動を開始していること、40%程度がエントリーシートの受付を開始していること、30%程度が面接を開始していることが説明された。さらに、内定の時期は主として 3-4 月であることも知らされた。また、就職企業を選ぶ際に重視する点として、給与・待遇の良さが上位に位置しており、視点の変化が見られた。エントリー数も少なく、企業を絞って就職活動する傾向があると説明された。 2. インターンシップの定義変更 インターンシップの考え方が変わり、これまでは、採用活動とは切り離されていたが、今後は、採用活動に直結させることができるようになった旨が説明された。また時期は、冬休み、春休みが多く、その他、週末を利用したものも散見されると知らされた。こういった背景から、学生へのインターンシップへの参加を促して欲しいと説明された。一方で、インターンシップへ呼ばれなかった学生への配慮もして欲しい (例えば、不利に働くことはないことや個性や能力が否定されたわけではないことを伝えること) とのことだった。 3. まとめ 理工系学生の現代における就職活動の実際を知るいい機会となった。上記の点を踏まえることで、就職活動学生に対して的確に助言・指導していけると考えられる。得られた知識を今後活かしていきたい。			

開催日時	令和 5 年 11 月 22 日 13:30-14:00	開催場所	農学部大会議室
テーマ	Moodle コースのデザインと小テストの基礎		
講師	齊藤 智也 氏 (情報基盤センター)	参加者	25 名程度 (把握し忘れました)
研修内容 創成科学研究科 (農学系) では, 農学部 FD 研修会と一緒に, 各種 FD 研修会を開催した。情報基盤センターの齊藤智也氏を講師に, 「Moodle コースのデザインと小テストの基礎」をテーマに講師派遣型 FD 研修会を実施した。主な内容は以下のとおり。 1. Moodle の概要 Moodle は, オープンソースの学習管理システムで, 多くの機能やコンテンツを持っていることが説明された。山口大学でも 1500 を超える科目で利用されている一方で, 農学部での利用コース数は極めて少ないことが知らされた。また, 操作方法が概説され, ホームページの作成やその管理と近いことが説明された。 2. Moodle の活用について 授業のコースは, 自動的に作成されること, 手動でも作成可能であることが説明された。特定の利用者は, 情報基盤センターに申請ののち, 練習用コースを作成していることが知らされた。その他, 資料の掲載手順等に関して簡単に説明を受けた。加えて, コンテンツやファイルの追加, 課題, 小テストの設定について説明された。 3. まとめ 便利な機能である一方で, 本部局では上手に活用できていないのが現状であった。申請あれば, 個別に指導をしていただけるとのことで, 今後 Moodle を活用することで, 教育効果を上げて行けるものと考えられる。初めの一步を踏み出すには, 十分な講演であったと個人的には思う。			

開催日時	令和6年1月10日	開催場所	農学部大会議室
テーマ	学生アンケート結果に関する意見交換会		
講師	なし。	参加者	8名
研修内容 創成科学研究科（農学系）では、農学部FD研修会と一緒に、各種FD研修会を開催した。各種学生アンケート（在学生アンケート、卒業時アンケート）結果を踏まえた意見交換会を実施した。下に、概要を記す。 ● 大学院生（キャリア形成、在学時、卒業時） 全てのアンケートにおいて、創成科学研究科、で行われているので、この情報を農学系の教育に活かしていくのは困難であるという意見が出た。できれば、細分化（理学系、工学系、農学系）したものアンケートを実施して欲しいとの提案が出た。また、総じて、アンケート回答者数の増加が必須。5-40%の回答率のもので議論するのは、偏りを生む可能性があるので、アンケート回答率の向上を可能にする仕組みの確立が望まれる（例えば、必修にする等）、といった意見が出た。			

（２）教育改善

<活動内容：授業公開（ピア・レビュー）>

創成科学研究科（農学系）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を実施し、意見交換により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。以下、本年度に実施した7回の研究紹介を記す。

- (i) 画像解析による植物モニタリング -AI 画像解析とファンクショナルイメージング-
日時: 令和5年5月31日(水) 15:30-16:30 荊木 康臣 先生
- (ii) レンコン腐敗病菌 *Fusarium commune* の特徴および防御に関する研究
- (iii) トマトの話
日時: 令和5年4月28日(金) 16:00-17:00 松井 健二 先生
- (iv) 高効率の光合成を担う C4 植物の細胞特異的な機能分化
日時: 令和5年度7月13日(木) 16:00-17:00 木股 洋子 先生
- (v) (微) 生物と温度の話
日時: 令和5年10月27日(金) 16:00-17:00 佐藤 悠 先生
- (vi) 病原性細菌のヘムの輸送と代謝に関する研究
日時: 令和5年12月1日(金) 16:00-17:00 小崎 紳一 先生
- (vii) 土着菌を生かす! ~アブラナ科作物根瘤病の軽減を物差しとして~
日時: 令和6年2月20日(火) 16:00-17:00 横山 和平 先生

＜ 15. 東アジア研究科の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 6 年 2 月 28 日	開催場所	経済学部 第一大講義室
テーマ	国費留学生のニーズ把握		
講師	八代拓	参加者	34 名
研修内容 本研究科は、在籍する国費留学生が研究生活を送る上での障壁を減らし、研究環境をさらに拡充させていくことを目指している。この観点から、国費留学生の意見を把握し教員間で共有した。 実施概要は下記の通りである。 ・ 実施期間：2024 年 2 月 15 日～2 月 26 日 ・ 対象者：東アジア研究科内の国費留学生（6 名） ・ 実施手法：メールによる意見聴取（自由記述） 把握された主な意見・要望は、次の通りである。 1) 研究円滑化のための支援措置 ・ 同じ研究分野の学生が集う合同ゼミの設置 ・ 学位論文や投稿論文のテンプレートの提供 ・ 研究経費の支援（研究科内での公募助成や外部資金の公募情報提供など） 2) チューター制度の整備 ・ 入学 1 年目の学生に対するチューターの配置 ・ 日本語校正をしてくれる日本人チューターの配置 3) 日常生活の支援 ・ 日常生活をサポートしてくれる仕組みの整備 ・ 各種手続きや〆切がワンストップで把握できるウェブサイトの設置 ・ 育児と研究の両立に関する支援 ・ 国際交流会館の居住可能期間の延長 これら要望の中には、全学的な対応が求められるものもあれば、学問分野間の慣行の違い等によって実現が難しいものもある。一方、チューターの配置については令和 6 年 4 月から試行的に実施をする予定である。特に日本語校正に関してはその品質を担保しうる人材の確保が課題であるものの、マッチングの仕組みづくりや外部人材の活用なども踏まえて、検討を続けていく。			

開催日時	令和6年3月27日	開催場所	経済学部 第一大講義室
テーマ	共同演習の課題と改善策		
講師	古賀大介	参加者	32名
研修内容 本研究科は、個別研究指導に加えて、次節で詳述する共同演習（基盤演習およびプロジェクト演習）を用いた集団指導体制を備えている点にその特徴がある。本研究科は、この集団指導体制をさらに充実させるための検討を進めてきた。FD 研修会においては、講座ごとに次のような問題意識や改善の方向性が示された。 【比較文化講座】 ・ 受講生と教員の専門が異なることが、良い点でもあり、悪い点でもある。専門外の人物にも平易に研究報告をする能力は体得できる。一方、専門外の教員がどこまで有益な指導をできるかは検討の余地がある。 ・ 学生の研究テーマが不明瞭な場合、専門外の教員からのコメントに答えることに学生が腐心し、研究テーマの明確化が疎かになる可能性がある。 【社会システム分析講座】 ・ 教員による質問に多くの時間が割かれ、授業時間内に学生同士が議論する形になりにくい。 ・ 英語話者と日本語話者の間での意思疎通が困難であり、指導内容が学生に十分に伝わっているか疑わしい。 ・ 演習中に交わされた議論が、学生を通じて指導教員に伝わらない場合がある。 【社会動態講座】 ・ 受講生が少ないため1か月に1回は発表が課せられる。博士論文の発表としては頻度が高く、前回報告からの十分な進捗が望めない。 ・ 共同演習の初講で発表資料の様式や報告者としての留意点などを研究科長から説明した結果、一定の改善が見られた。 ・ 共同演習が博士論文の構想・進捗の場である以上、博士論文の提出要件や査読体制等についても、共同演習に参加する教員で検討を進めていくべき。 共同演習の実施に係る課題については、次節に示す通りこれまでも検討が試みられており、今後により良い研究指導の場とするために更なる改善策を講じる予定である。			

（２）教育改善

＜活動内容：授業公開＞

博士後期課程のみという性質上、東アジア研究科は基本的に講義形式での授業を重視していない。当研究科は、設置目的の通り「問題解決のための高度な専門知識を発揮しうる人材の養成、指導的高度専門職業人の養成」を目指している。また、ディプロマ・ポリシーが示す通り「独自に問題を立て、研究を遂行して成果を生み出すことができる自立的な研究能力」を養成することを主眼としている。このため、学識を授けるという意味合いの強い講義形式の授業よりも、各院生に対する個別研究指導が主な形式となっている。

とはいえ、授業公開に類する内容として、以下の取り組みを行っている。

（１）集団指導の場としての「基盤演習」「プロジェクト演習」

上記の特性を持つ当研究科は、カリキュラム・ポリシーに従って、１年次に「基盤演習」を、２年次に「プロジェクト演習」を課している（以下「共同演習」）。共同演習はコース別に実施されている。実施手法としては、学生の研究報告に対して複数の教員がコメント・意見を述べる集団指導体制を取っている。

この共同演習は、教員間でお互いの指導を確認し合う間接的な授業公開の場となっている。参加教員からのコメントは指導教員にとっても貴重な示唆を与えるものであり、自らの研究指導へのヒントや改善の契機となっている。この意味で、共同演習は、間接的なピア・レビューの効果を持ち、当研究科教員の研究指導能力向上に重要な意義を有する。

（２）個別研究指導の場としての「特別研究」

当研究科の主たる教育活動は、在籍院生に対する個別の研究指導である。「特別研究」がこれに相当する。同科目の内容は、基本的に各院生の研究テーマや研究の到達状況に応じて柔軟に調整している。このため、同科目を公開し、ピア・レビューの対象とすることは難しい。

一方、当研究科では研究指導の中核を担ってきた経験豊富な教員の定年退職が見込まれている。当研究科の研究教育能力の拡充のためには、「特別研究」における研究指導のノウハウを研究科全体として蓄積し、次世代を担う若手教員に継承することが重要な課題である。

＜活動内容：教育方法や授業形態の改善＞

前項にも述べたように、東アジア研究科は個別研究指導に加えて、共同演習を用いた集団指導体制を備えている点に特徴がある。本研究科は、この集団指導体制をさらに充実させるための検討を進めている。例えば社会動態講座内では、2021 年 12 月より「共同演習に関するワーキンググループ（以下、WG）」を設置しており、今後の指導運営体制に関する協議・検討を行ってきた。これまでの議論のうち、主なものは以下の通りである。

- ・ 基盤演習における指導内容が翌年のプロジェクト演習の担当教員に十分に引き継がれていない場合がある。このため、両演習間の関係をより緊密にすべき。
- ・ 院生の報告に対して、主指導教員がどの程度まで前面に立って他の教員に解説を加えるか、検討の余地がある。
- ・ 英語話者と日本語話者の混在する環境で、意思疎通・コミュニケーションが不十分になる。
- ・ 一回あたりの報告者数が多い場合、時間的制約から十分な議論が行えない場合がある。
- ・ 報告資料の体裁や内容が報告者によって異なり、前回との相違や進捗・改善状況が明確でない場合がある。
- ・ 報告者から多量の資料が事前に提供され、かつどの資料が重要なのか判別できない場合、資料を読み込むための教員の負担が大きくなる。
- ・ 自らの専門外の報告に対して、教員がどのようにコメントし、学生の報告に貢献するか。

上記問題を一挙に解決することは困難であるが、これまでの議論の結果、例えば社会動態講座では次のような検討がなされた。

- ・ 共同演習オリエンテーション（ガイダンス）の実施：オリエンテーションを通じて、共同演習でのルールを周知し、再度確認する。
- ・ 学生便覧に記載されている基盤演習・プロジェクト演習の目標をより詳細化し、上記オリエンテーションでも周知する。
 - 基盤演習の目的：博士論文のテーマ、編別構成設定、博士論文作成に必要な基本的な学術作法の修得
 - プロジェクト演習の目的：基盤演習での習得内容を土台とした完成度の高い博士論文（特に編別構成）の作成
- ・ 退職者を 1 年間に限り非常勤として採用できないか、また対外的 PR や入試選抜の改善が可能か、検討課題とする

これらについて、同講座内で改善策を実施する予定である。また、同改善策の結果を見つつ、検討と更なる改善を行なっていく。

上記課題については、翌年度に更なる改善が可能かどうかを検討していく。なお、例年行ってきた各講座での研究指導 FD（第 2 節参照）と共同演習に関する検討を相互に関連させつつ、東アジア研究科の FD 活動のあり方に新たな方向性を見出すことが期待される。

< 16. 技術経営研究科のFD>

(1) 学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和6年3月5日 13:00-14:00	開催場所	技術経営研究科 会議室
テーマ	海外研究強力連携大学における最新の研究動向を学ぶ		
講師	Dr. Nur Arfah Mustapha	参加者	12名

研修内容

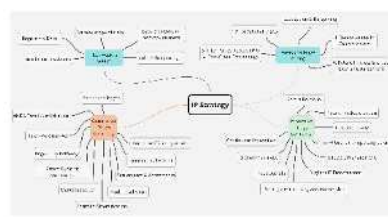
マラ工科大学ビジネススクールと山口大学の令和5年度クロスアポイント教員である Dr. Nur Arfah Mustapha を講師として迎えて、オレンジブックのデータと的を絞ったケーススタディを活用し、特許訴訟と特許管理の領域におけるジェネリック医薬品メーカーと革新的医薬品メーカーの戦略的策略に関する調査研究について解説して頂いた。

Title

Deciphering Patent Strength: Pharmaceutical Industry's Patent Landscape

特許の強さを読み解く～製薬業界の特許事情～

This study meticulously examines the nuances of patent categorization in the pharmaceutical industry, focusing on the delineation between strong and weak patents. Leveraging Orange Book data and targeted case studies, it scrutinizes the strategic maneuvers of both generic and innovative drug manufacturers in the arenas of patent litigation and management. Through a methodological lens, we dissect the patenting strategies employed by both generic and innovative drug manufacturers, spotlighting the pervasive development of patent thickets. These thickets, manifested through the iterative patenting of drug modifications, serve not only to fortify ownership claims but also to sculpt the competitive landscape, precipitating legal skirmishes and the strategic use of 'pay for delay' agreements. Such tactics, while fostering profit-sharing among entities, invariably exert upward pressure on drug pricing, consequently burdening healthcare affordability. These maneuvers, aimed at profit maximization, consequentially escalate drug prices and challenge healthcare affordability. The research methodology hinges on a multifaceted analysis, combining quantitative data assessment with qualitative case study explorations to draw insights into the strategic underpinnings of patent management and litigation. Additionally, the study casts a spotlight on the global repercussions of such strategies, underscoring their impact on escalating healthcare costs. This research enriches the discourse on patent dynamics in the pharmaceutical industry, highlighting its legal, economic, and ethical stakes.



（２）教育改善

＜活動内容：教育の質の保証と改善＞

社会人ならびに留学生を対象にした技術経営教育の質の保証と改善に向けた検討

1. 背景

情報通信技術(ICT)の高度化に伴い、社会経済が大きく変化している。この状況の下、新たな知識・スキル・思考力を獲得するため、社会人が大学で学び直す必要性が増している。また、グローバル化の進展により、海外大学と共同で国際的に活躍する人材を育成する必要性が生じている。これらは本学が「明日の山口大学ビジョン 2030」において掲げている「高度な専門性と社会性を持つ指導的人材の育成」や「グローバル力を強化する大学院教育の推進」といった目標と同じ方向性を持つものである。これらを受けて本研究科では、「国内では西日本地域において、国外では東アジア・東南アジアにおいて<技術経営>者を目指す人々の『最優先志望』となることを目指す」という中長期ビジョンを掲げ、福岡・広島教室においては日本人社会人を、宇部教室においては留学生を対象とする技術経営教育を実施した。

2. 今後の課題

2.1 ハイフレックス型教育の実施と教材の整備：コロナ禍をきっかけにオンライン教育が進化し、その結果ハイフレックス型教育の重要性が増した。収束後もこのオンライン形式による講義設計は継続的に必要となる。対面型教育とオンライン教育を同時に進行させるためには、教材のデジタル化やオンライン教育用の教育ツールを拡充することが重要となる。

2.2 教育システムの拡充と維持：これまでハイフレックス型教育を実現するための教育システムの拡充を計ってきた。今後は、ただシステムを設置するだけではなく、その運用と維持が重要な課題となる。システムのメンテナンス、トラブルシューティング、最新のテクノロジーへのアップデートなど、継続的なシステムの運用と管理について検討を要する。

2.3 教員のデジタルスキル向上：教員自身が新しい教育スタイルやテクノロジーを適応することは大きな課題である。教員のデジタルリテラシーを向上させるための継続的なトレーニングとサポートを検討する。

2.4 学生のテクノロジーへのアクセスとリテラシー向上：全ての社会人大学院生が適切なテクノロジーへのアクセスを持ち、オンラインでの学習に適応する能力を持つわけではない。当研究科大学院生のデジタルリテラシー向上と適切なテクノロジーへのアクセスを検討する。

2.5 対面とオンラインのバランス：ハイフレックス型教育では対面とオンラインの両方の形式をバランス良く取り入れることが重要となる。全てをオンラインに移行するのではなく、対面での講義や実践的な演習の配置を考慮し、最適な教育形式を選択する必要がある。技術経営研究科では、特定課題研究発表のオンデマンド化を推進してきた。今後、特定課題研究発表における教員と学生の間での対話やフィードバックをどのようにライブ化するかが重要となり、適切な実施方法を検討する。

＜ 17. 共同獣医学研究科の FD＞

共同獣医学研究科の FD 活動は、共同獣医学部の FD 活動に参加する形で行われた。具体的な活動内容に関しては、II-8「共同獣医学部の FD」を参照されたい。

令和5年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職 名	氏 名	任 期
	副学長（教育学生担当）	葛 崎 偉	
教育・学生支援機構	教学マネジメント室長	野崎 浩二	
〃	教育支援センター長	野崎 浩二	
〃	学生支援センター長	高橋 肇	
〃	保健管理センター所長	奥屋 茂	
人文学部	教 授	谷部 真吾	4.4.1～6.3.31
〃	教 授	野坂 昭雄	5.4.1～7.3.31
教育学部	教 授	曾根 涼子	4.4.1～6.3.31
〃	教 授	藤本 幸伸	5.4.1～7.3.31
経済学部	教 授	新祖 隆志郎	5.4.1～6.3.31
〃	教 授	立山 紘毅	5.4.1～6.3.31
理学部	教 授	新沼 浩太郎	5.4.1～6.3.31
〃	教 授	末竹 規哲	5.4.1～7.3.31
医学部	教 授	田中 伸明	4.4.1～6.3.31
〃	教 授	石原 秀行	5.4.1～7.3.31
工学部	教 授	樋口 隆哉	4.4.1～6.3.31
〃	教 授	田之上 健一郎	5.4.1～7.3.31
農学部	教 授	鈴木 賢士	4.4.1～6.3.31
〃	准教授	片岡 尚也	5.4.1～7.3.31
共同獣医学部	准教授	渋谷 周作	4.4.1～6.3.31
〃	准教授	三宅 在子	5.4.1～7.3.31
国際総合科学部	教 授	有元 光彦	4.4.1～6.3.31
〃	教 授	赤井 光治	5.4.1～7.3.31
事務局	学生支援部長	福田 孝	
〃	学生支援部教育支援課長	梶村 裕二	
〃	学生支援部学生支援課長	宮本 達司	

令和5年度 山口大学 学部・研究科FDコーディネータ 名簿

部 局 等	職 名	氏 名
人文学部 人文科学研究科	准教授	横田 蔵人
教育学部 教育学研究科	教 授	白石 敏行
経済学部 経済学研究科	教 授	中村 美紀子
理学部 創成科学研究科(理学)	教 授	新沼 浩太郎
医学部(医学科) 医学系研究科	教 授	白澤 文吾
医学部(保健学科) 医学系研究科	教 授	村上 京子
工学部 創成科学研究科(工学)	教 授	樋口 隆哉
	教 授	稲井 栄一
農学部 創成科学研究科(農学)	准教授	片岡 尚也
共同獣医学部 共同獣医学研究科	准教授	三宅 在子
国際総合科学部	教 授	北西 功一
東アジア研究科	准教授	八代 拓
技術経営研究科	教 授	大島 直樹

令和5年度 山口大学 教学マネジメント室 名簿

室 長	野崎 浩二	学長特命補佐(大学院創成科学研究科(理) 教授)
副室長	福田 孝	学生支援部長
室 員	岩野 摩耶	教育・学生支援機構 教学マネジメント室 講師
	藤本 正己	教育・学生支援機構 教学マネジメント室 講師
	横田 尚俊	副学長補佐(人文学部 教授)
	麻生 稔彦	副学長補佐(大学院創成科学研究科(工) 教授)
	和泉 研二	教育・学生支援機構 副機構長(教育学部 教授)
	高橋 肇	教育・学生支援機構 副機構長(大学院創成科学研究科(農)教授)
	林 寛子	教育・学生支援機構 アドミッションセンター 准教授

令和5年度 山口大学のFD 報告書

令和6年10月発行

編集・発行 山口大学教育・学生支援機構

山口大学教学委員会

山口市吉田 1677-1

TEL (083) 933-5060 (学生支援部教育支援課)